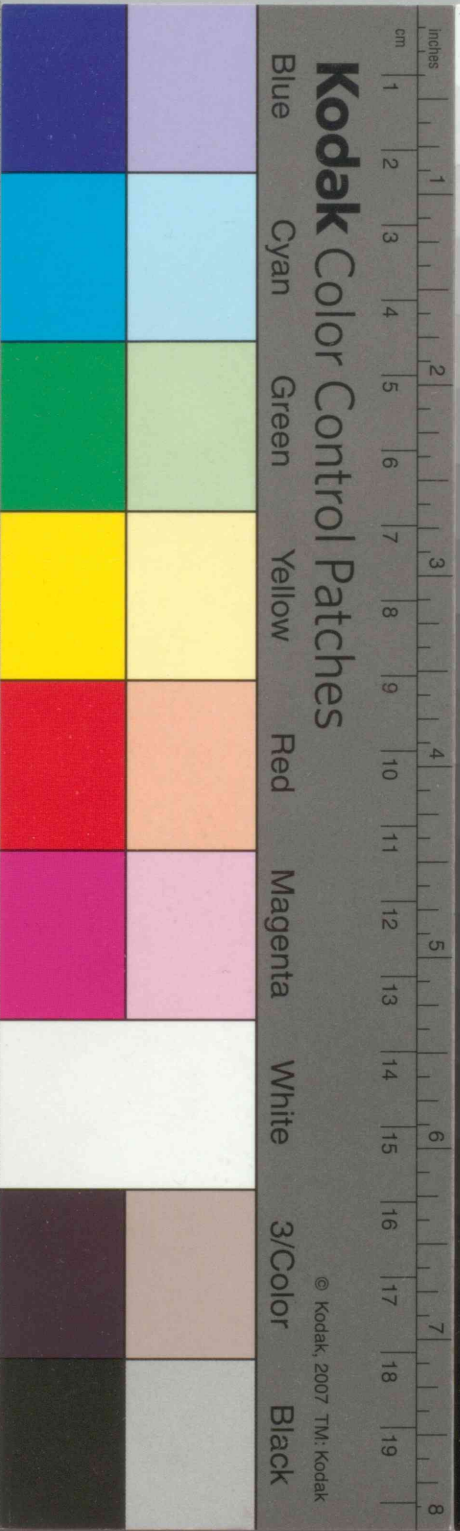


訂六 女子國語讀本 卷二

375.9
Y619
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42205

教科書文庫

4
810
42-1925
20003
01733



375.9
Y019

日八十月二年四十正大
濟定檢省部文
書科教科語國校學女等高



廣島女子國語讀本

女子國語讀本卷二

吉田彌平 篠田利英
小島政吉 岡田正美

共編

金港堂書籍株式會社

訂六 女子國語讀本卷二

目次

一	皇后宮の御淑徳	一
二	花火	五
三	金剛山	三
四	波の音	七
五	夕暮	三
六	専心	三
七	大阪城	三
八	かなりや	三

目次

九	動物の天國	上原敬	二
一〇	瓜生岩子	金子元臣	五
一一	永代橋		五
一二	村の秋	徳富健次郎	五
一三	おとゝえ	大和田建樹	三
一四	卑下		五
一五	頓智救命		七
一六	貨幣礫	三浦修吾	七
一七	幼時の美感	正岡子規	六
一八	自由の神		六
一九	泉岳寺	大町桂月	九

二〇	北地の冬	五十嵐力	五
二一	歳暮感懐	中邨秋香	六
二二	一年ノ計		九
二三	田舎の祖母に	樋口一葉	一〇
二四	孝女いち		一三
二五	名人團平		一三
二六	氷の諏訪湖	吉江孤雁	一九
二七	深海	飯島魁	二三
二八	ペンギン鳥	杉村廣太郎	二七
二九	安宅	坪内雄藏	二三
三〇	雛祭の記	高濱虚子	二九

五二 山彦……………大隈言道 二四二

五三 豪商と碩儒……………一四三

三三 樂しき我が家……………一四九

三四 曾我兄弟……………森林太郎 一五三



六訂 女子國語讀本卷二

一 皇后宮の御淑徳

皇后陛下の、なほ御幼少におはせし頃の御逸事を洩れ承るまゝに、一つ二つ左に記し奉りてん。

陛下には、夙くより御儉素を好ませられき。御服装のごときも、極めて御質素を旨としたまへば、侍女などの、かくては餘りなるへければ、今少しは、「など」勸めまゐらすることもありつれど、いつも用ひさせたまはざりき。あるとき、御同級の御學友と打連れて、何處へか出立たせたまふことありし

に、誰言ひいづるともなく、いでたちは同じくするこそよけれ。とて、衣服はしかく、髪はかくくとかたらひしを、かくと聞かせたまひて、暫し打案じたまひしが、やがて、衣服は如何なるものにもよからん。ことさらに好みて新なるをものせんは、益なき事ならずや。とのたまひければ、みなくげにもと心づきて、いづれも御旨に従ひたてまつりきとなん。」是も猶九條家におはしまし、程の事なり。仕うまつれる者どもの起きいでて、雨戸繰りあくる頃には、必ず御起床あらせられ、直ちに御手水を召すを例としたまへり。ある時、例の如く、早く起きいでさせ給ひけるに、折しも、日の出いと遅き冬の頃なりければ、やうく、御湯釜の下を焚きつけし

ばかりにて、御湯は、未だ日向水ほどにもあた、まらざりしかど、つゆ厭はせ給ふ御氣色もなく、そのまゝ、汲取りて用ひさせ給ひしかば、仕うまつれる者どもいと畏みて、其の翌朝はつとめて夙く起きいで、御湯を沸しまるらせける程に、早くもそれと知しめされて、我が身一人の爲に、かく人々を勞せしめんこと心苦し。とて、其の後は、起きいでたまひても、直ちには御手水を召させ給はざりしかば、仕うまつれる者ども、いよく、畏みて、ありがたき御心に感じ合ひけりとぞ。さるほどに、宮中に入らせたまふべき御内議既に定まり、學校も御退學あそばさるべき御都合となりしに、御父道孝公、「宮中に入らせられんには、學校の人々も容易く拜謁は叶ふ

まじ。されば、此の際、御教授にあづかりつる人々を招きて、御告別あらせられ、かつは、日頃の勞をも謝したまはんこと然るべくや。」と思召して、そのよしを聞えまゐらせられしに、いたくその御志を喜ばせたまひて、同じくは幼き頃よりの師をも。」と望ませたまひければ、やがて、思召のまに／＼取計らはれ、明治三十二年十月二十九日と云ふに、細川華族女學校長^(三)下田學監を始め、小學部の職員に至るまで、残りなく御邸に招かせられたり。かくて、席上親しく御告別の御詞あらせられ、かつ御記念として、御手づから貴き御品を下し賜ひ、また、曾て御教育には與りながら、すでに亡き數に入りし人々の、此の御席に陪せざるをば、のこりをしうあはれに思

細川潤次郎。

下田歌子。

召され、其の人々の遺族に對しては、別に若干の御目錄をさへ遣はしたまひぬ。實にや、師弟の契こそあれ、此の時を限として、互に雲上地下と隔りぬべければ、御別れを惜ませたまひしも御理りなるが、さるにても、御身既に貴くして尙能く人に下りたまひ、たゞに眼前の人々を愛したまふのみならず、遙かに泉下の者までをも、御心にかけてさせたまへる御志、まことにありがたききはみとこそ申すべけれ。

(聖徳餘聞に據る)

二 花 火

生 田 春 月

郷里の白河^(三)に歸つてゐた私の若い友達が、最近出て來て、震

詩人。
名は清平。
福島縣白河郡白河町。
東北本線で奥州への入口。
大正十二年九月一日の關東大震。

二 花 火

災當時、其の町にあつた面白い話を聞かせてくれた。今度の震災で、いろ／＼な悲惨な話や、涙のこぼれる様な話や、珍しい話も澤山あらうが、こんな面白い愉快な話は、一寸外に聞いた事がない。氣の利いた小説を書く才能をもつた人ならば、此の話から、すばらしい傑作を書くことが出来るであらう。私にはそんなことは出来ないから、唯聞いたまゝを簡単に書いて見よう。

あの時には白河の町にも、澤山の人が汽車から降された。其の中に大阪の方から来て、秋田へ行くのだといふ一人の男があつた。警官や町の人たちが多勢立會の上、其の男の携帶品を取調べたところが、驚いた事には、彼は十個の爆彈

を携帶してゐたのである。そこで、自警團の連中は憤激した。「此奴はあやしい奴に違ひない、擲つてしまへ、擲つてしまへ」と氣の早い連中はどなり立てた。すると此の男は、すつかり狼狽してしまつて、へどもどしながら、斯ういふ辯解をした。自分は決して怪しい者ではない、あなた方が爆彈だと仰しやるのは、是は實は花火であつて、秋田の共進會に出品しようと思つて持つて來たのだと、かう言ひ張つて聽かなかつた。

果して彼の言ふやうに、それが花火であるか、それとも爆彈であるのか、白河の人達には、到底判断する事が出来なかつた。一度花火の装置を見た事のある男の説では、成程恰好

は花火には似てゐるが、花火にしては第一あんまり大き過ぎるといふ。近頃の爆弾は随分色々な形状と装置とを持つてゐるから、是は爆弾に違ひないと云ふので、殺氣立つた町の人は、あはや大阪の男を取りこめて、手にく棒や武器を振廻さうとしたのを、警官が一生懸命に制してゐると、其の男はがたく、頭へながら、到頭堪らなくなつたと見えて、「そんなら一つこれを揚げて見まつせ」と大阪辯で言ひ出した。「揚げて見さへすりや、爆弾だか花火だかちきに分りますは。花火も花火、秋田の共進會で一等を取りたいと思つて、わたしが一生一代の腕によりをかけてこしらへたもので、そりやすばらしいものだつせ。」さうか、そんなら一つ

揚げて見る。そんなに自慢をする位なら、まんざら嘘でもあるまい。」と云ふので、愈それを揚げて見ることになつて、それまでは、彼は警察で保護して貰ふことになつた。併し、萬一爆弾であつたら大變だといふので、警察から町中に、今夜何時に、何處其處で彼の怪しい人物の携帯品を、爆弾か花火か實際に火をつけて見るから、其の爆音に驚かないやうにとふれをした。すると其の夜、好奇と不安の心に驅られた町中の人々は、指定の廣場に集つて來た。愈一定の時刻が來ると、彼の男は嚴重な警戒と監視のもとに、廣場の眞中に立ち現れた。

「爆弾だなんて事を仰しやりますが、まあ御覽じろ、そりや、

どえらい見事なものだつせ」と彼は、自慢しながら、用意を始めた。どうかして命を助かりたい一念と、自分の努力の効果を見る期待とに彼は興奮して、せつせと支度を始めた。併し、花火を打上げる適當の筒が其の町に無かつたので、急ごしらへにこしらへた筒に入れて、先づ最初の一發に點火した。

花火が爆彈かと、半ば恐怖に驅られて、廣場を遠卷にして見物してゐる町の人達の目の前に、昇り龍、降り龍などと云つたやうな、平凡なものではなかつたであらうが、兎に角彼の言つたやうな、すばらしい空中の蜃氣樓が、燦爛たる火光を放つたのである。

「ほんとに花火だ、私どもはこんな立派な花火をまだ見た事がない。」と、町の人達はめい／＼有らん限の感嘆の聲を放つた。

「成程花火だ、見事な出来だ。お前はなか／＼い、腕を持つてゐるな。」と、警官も大いに彼を賞揚した。

「もつと揚げる揚げる。」と群集は叫んだ。

「揚げまつさ、みんな揚げてしまひまつさ。此の次のは、もつと上等だつせ。」と彼は言つて、また更に一發に點火した。かうして彼が秋田の共進會で、一等を取らうと意氣こんでゐた十發の花火は、到頭一つ残らず試されて、白河の空の上、彼の優れた技倆を十分に發揮して消えてしまつた。

「私の書き方は一向つまらなかつたが、此の花火の話其の物は、實に面白いではないか。文藝家の才筆を煩はしたら、どんなすばらしい小説になつたか知れない。此の大阪の花火屋の技倆は冴えてゐたに違ひない、恐らく超凡のものであつたと言ひ得るだらう、何しろ一同が我を忘れて見て居たことであるから。そして命を助かつた彼も幸福であつたが、こんなすばらしい花火を見る事を得た白河の人達も、幸福であつた。」

「私はそれを見ませんでした。私に其の話を聞かせてくれた若い友達が言つて笑つた。私も笑つた。そして、花火がすばらしい藝術であることを、今始めて知つたのである。そして、此のすばらしい藝術をつくるものが、單に其の作者一個ではなくして、實にその場合の自然も與つて力ある事を知つたのである。そして、私の此の結論が小説の形式にかなふか否かは、私の敢へて問はないところである。(智慧に輝く愛)

喜んでゐました。」と、私に其の話を聞かせてくれた若い友達が言つて笑つた。私も笑つた。そして、花火がすばらしい藝術であることを、今始めて知つたのである。そして、此のすばらしい藝術をつくるものが、單に其の作者一個ではなくして、實にその場合の自然も與つて力ある事を知つたのである。そして、私の此の結論が小説の形式にかなふか否かは、私の敢へて問はないところである。(智慧に輝く愛)

三 金剛山

大町 桂月

人若し、金剛山は富士山と比較して如何。と問ふ者あらば、余はまづ答へて曰はん、富士山は正々堂々の極なり。金剛山

三 金剛山

一三

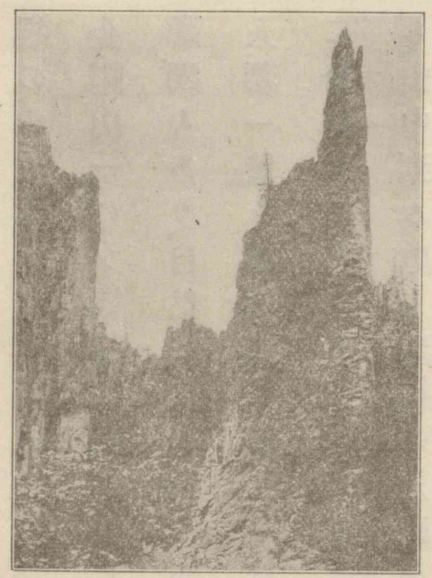
朝鮮第一の名山
江原道の東海岸
にある。
名は芳術。
文章家。
二位

は奇々怪々の極なり。」と。富士山は火山なるが、金剛山は火山に非ずして、花崗岩の山なり。しかも一萬二千峯皆山骨を露出す。金剛山一に皆骨と稱す、露骨に失する嫌はあれども、極めて適切なり。到る處に奇巖立ち怪石横たはりて、石門もあり、四方何處より見ても、數千萬の箱を積上げたる如きもあり、筈の如きもあり、塔の如きもあり、屏風の如きもあり、人の如きもあり。

全石を底とするは、溪流としては稀には見る所なれども、金剛山中には到る處にありて、皆に全石を底とするのみならず、その全石は兩側の絶壁にも及び、しかも絶壁高く、溪も大にして長さ十數町に達せるもあり。磐石の瀧壺も、小瀑に

特色
花崗岩
圧石
磐石
瀧壺
石門
奇巖
怪石
屏風
塔
筈
箱
山骨
露骨
絶壁
溪流
小瀑
大溪

説明



外金剛萬物相の門岩

は見ることにあれども、大瀑には見難きものなるを、金剛山には、直下十餘丈の大瀑の、瀧壺の徑五間もありて、圓形をなし、水澄めるに、底の見えざるまでの深さを有して、恰も人工にて削りたるが如きもあるなり。

皆骨とはいへども、巖は皆松を帯びたり。一にまた蓬萊山と稱するも、言ひ得て切なるかな。松は黒松の外に、朝鮮松と稱する一種の松多し。葉は五葉なれども、普通の五葉松・赤松・黒松の如く黒ずまずして、鮮かなる青色

三 金剛山

を帯び、其の實は拳より大にして食ふべし。金剛山は巖の山と云へば、巖の山なれど、松の山と云へば松の山なり。又、楓の山と云へば楓の山なり。楓の多きこと天下に稀なり。金剛山一に又楓嶽と稱す、眞に其の名に負かず。櫻もあり、躑躅もあり、自然生の芍薬もあり、又自然生の人蔘もあり。人蔘一箇その價二百圓にのぼる。それを得んとして、山中に分け入るものも少からず。金剛山は天下の絶険なれども、山中到る處、人蔘掘の足跡を印せざるは無しと聞く。重石の多きことも世界無比なり。三井にては出張所を置き、山北より發掘す。山中の寺々も、山水に風致を添へ、且登攀者に宿泊の便宜を與ふるが、懸崖に懸り、深山の奥に孤立

十一列

自然美、特
カ、隣、マ、リ、テ、ム、ン

三日浦。

名は昌治。
文學者。

新潟縣糸魚川町
の。

するなど、よくも斯る處にと、人をして一驚を喫せしむ。温泉といふ天恵もある上に、湖水の趣も賞すべく、自然美の粹鍾つて金剛の一山に在り。余は日々巡覽して三週間に互りたれども、なほ餘裕あらばと思ひたりき。(中央公論)

波の音

相馬御風

私の書齋の南の窓からは、様々の形をした高い山の幾つも立ち並んでゐるのが見えるが、北の窓からは、裏の家の屋根越しに、茫々とした日本海が見渡される。波ぎはまでの距離が一町とないので、秋の末から冬へかけては、殆ど毎日す

波の音

*小説家。
肥行文家。
名は録翫。

さまじい波の音が家をゆすぶるのであるけれども、さうした波のひびきも、住慣れるに従つて、段々驚かなくなつて行く。曾て私が田山花袋氏*に書いて貰つた短冊のうち、

なみく／＼に心はやすし、荒波の

さわぐ磯邊にけふはねたれど。

といふ一首が有つた。ひどく其の歌が心になつたので、書齋の柱の短冊掛けにずっとその短冊をかけ續けてゐる。波の音が苦になつて眠れないやうな夜も、ずっと以前には有つたが、此の頃は全くそんな事がなくなつた。それどころでなく、この頃は寧ろ其の波の音に、一種の深い親みをさへ覺えるやうになつた。たまに、波の音の全く聞えない土

地へ行つて宿つた夜など、妙に物足らないやうに感ずるところとさへある。漁師たちは、夜靜かに波の音を聞いてゐると、翌日の天氣が解るとまで云つてゐる。

二

時として、海がまるで油を流したやうに、平に風ぐことがある。そんな時の方が却て凄みがある。おまけにさうした場合、見渡すかぎり一隻の小船すらも認められなかつたりすると、その凄みは一層深みが加はつてくる。海が最も快活な相を現すのは、そよ風に漣波の織出される時である。油を流したやうに平に風渡つた海、魔女が持つといふ鏡かなどのやうに、平に澄渡つた池又は暴風の來ようとする前

などに、じつと息を凝したやうに静まり切つてゐる森——それらの静寂な姿には、何れも神秘的な凄みが伴ふ。しかも時あつて、さうした神秘的な静寂の世界へ、一羽の水鳥、一片の落葉でも突如として一脈の動を點ずる刹那材料の感じ——それにも測り知れない深さがある。

自分の動く音以外に、何の音もない夜の静寂の底に浸つてゐる時、一羽の蛾が燈火のあたりに動く、その刹那に感ずる生の波動——それにも測り知れない深さがある。

三

山に對し、波を聽きつゝ送る私たちの朝夕は單調である。しかも、私はその單調裡にあつて、今では寧ろ、今一層單調に

！と希ふ程に慣れてしまつた。(對山雜記)

五 夕暮

柳澤 健

*詩人。
新聞記者。
今外務省電信課長。

お宮の屋根には親の鳩
落葉の上には子の小鳩
ほろ／＼ほろり、ほろほろり、
啼いてるうちに日が暮れた。

峠三里の上り下り、
やつこらやつと來は來たが
めざした街の灯が、

見えないうちに日が暮れた。

徑は小暗し、燈は持たず、

落葉かさく、悲しく寒く

嘆息つけばほろほろり、

鳩の啼く音に月が出た。(鑑賞自由詩選)

*詩人。
名は隆吉。

六 専心

*北原 白秋

麝香の鑑定をする支那人の話が面白い。

それは神わざに近いものである。一體麝香と云ふものは、麝香鹿の腹部にある囊に這入つてゐるもので、其の入つた

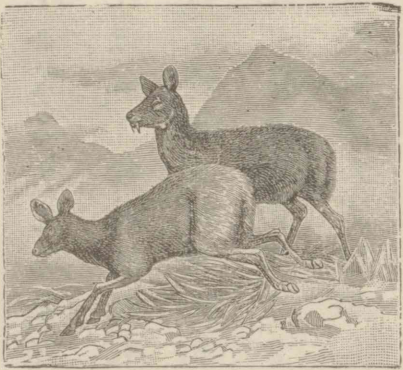
まゝの囊を圓く刳り抜いて麝香商の處へ賣りに来る。それが非常に高價な所から、賣る方でも此の頃は愈狡くなつて、囊の中に鉛を入れて、知らぬ顔で持つて來るといふのである。其の鉛の入れ方も、愈巧妙になつて來て、たゞ天秤にかけたゞけでは、其の重さと云ひ、香と云ひ、色艶と云ひ、真正銘の麝香と寸分も見わけがつかない。そこで麝香商の店にも、其の鑑定をする男を一人、必ず雇ひ入れてあるさうである。其の鑑定の仕事が又悠長なものである。其の男は一方の掌の上に本物の麝香を載せ、一方の掌に新しいのを載せると、兩手を互にゆつくりと上げ下げしてゐる。唯それだけで、其の兩方の重さを掌の中で上げ下げしながら

ら量つてゐる。さうして、それが本物か、いかさま物か、愈、ど
ちらか解るまでは、一時間でも二時間でも、半日でも両手を
唯上げ下げしてゐる。

時とすると、手の上の麝香を入れ換へて見たり、又元の手に
移して見たりしては、唯上げ下げして居る。全く氣の長い
話であるが、それでちやんと解つてしまふから驚く。そこ
で愈、怪しいと極めてしまふと、いきなり鋭いナイフを執つ
て、ぐいと其の囊の中へ突込んで、きり／＼と割つて、ぽんと
鉛を放り出してしまふ。其の鑑定が又千に一つの外れは
無いと云ふのだから、猶更驚くのである。

其の掌の上の觸覺の微妙纖細な事は、唯それだけを鍛へ拔

いたお蔭とはいへ、全く技、神に入ると云つていゝ。これは
驚くべき一種の專心の賜である。



麝香鹿

由來支那人と云へば、流石に大陸の人間だけあつて、萬づ大
まかで、如何にももの／＼してゐる
が、其の専門的の事にかけると、全く
小賢しい國民などの思ひも寄らぬ
妙技を發揮する。是は専ら専心な
鍛錬の結果で、何事も其のねばり強
い執着と、大愚に近いまでの氣長な修道心から、遂には人間
以上の不可思議にまで達したのである。

金銀の鑑定なども、それは鋭いものだと云ふ。それなども、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

手の平に、金貨、銀貨を一杯に取りまぜて載せると、其の五本の指先から一つづつ面白い程早く落して行く。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて、一つく落ちかゝるところを、怪しいと見ると、ちいんと弾き飛ばしてしまふ。それも千に一つの間違も無いと云ふのだから驚く。是などは全く指先の感じから落ちかゝるとすぐ直覺してしまふので、つまり専心修練の結果である。それでをかしい事には、さういふ麝香や金銀の鑑定をする男は、唯それだけの者で、世の中の事も知らなければ、何一つ出来ないで、其の事以外はたゞのろくくと遊びほうけて居るばかりだとの事である。唯一日中御馳走を食べて、掌を

五九四の女
 九人

上げ下げしたり、鐵の棒でちいんとやるだけださうである。九州へ旅した事のある人が、何かの話の序に、あちらの女はえらいと感歎するのを聞いた。それは敏感であるとの事である。私も或時、旅宿で食事の時、割箸を割り損つてぼきりと音を立てた。それは傍に居る人でも氣が付かないくらい、幽かな一寸した音に過ぎなかつた。それであるのに驚いた事には、もう座を立つて梯子段のきはまで下つて行つた女中が、はつと向き直ると、御箸が折れましたか、相済みません、今すぐに持つて参ります。」と云つた。それはく細かなものである。一體人は目に物を見ながら頭に入れて居ない事が多い。

私が外科の手術を受けて、永い事或下町の病院に入つて居た時の事である。窓の前の中庭には檜と槇が二本あつて、其の間に物干竿が一本掛け渡してあつた。何時も其の方ばかり眺めて居たので、それが目に付かなかつた譯は無い。それが驚いた事には、五十日餘りといふもの、全く頭の中に入つてゐなかつたのである。或日雨がびしょ／＼降つて、非常に陰氣な午後であつた。手術の創痕が其の日は取分けてきり／＼痛む。あゝ痛い、／＼、あゝ痛い、あゝ／＼と思つて庭の方を見て居るうちに、其の青い竿がはつきりと目に見えて來た。おや、あんな竿が有つたのかと思つて、私は思はず目を瞠つたが、五十日の餘もそれを見て居ながら、少

しも氣がつかかなかつた自分の迂濶さ加減には、猶更吃驚してしまつたのである。情ないことだと思ふ。つい目と鼻の間だ。何時も目に入つてゐたにちがひない。それが見えなかつたのは、専心のない、何時もの空虚な心であるからである。身體がきり／＼痛むので、心が痛む、鋭くなる。其のはずみに目に入つた。そこでやつと心に焼付けられたのである。私達は何時も目に見た物を、何時も目ばかりでなく心に徹して、其の心の眼でしかと見据ゑるだけの引締つた心でありたいのである。名人は瞬かす、そこに隙が一つ在つてもいけないのである。

阿古屋貝が病氣をすれば眞珠が生れる。人も眞實に患へれば其處で心の眼が開ける。要するに人間の心は、何時も苦みと患ひとの中に、きり／＼痛んで居なければ決して磨かれはせぬのである。又何事につけても其の痛さを痛切に感じ得る心でなければ、いゝ心とは言はれない。かうした考から、時には雀もありがたい。私が住んで居た二階の窓の向ふに、木槿の垣根が在つた。毎朝白い木槿の花は開いてゐたが、私は毎朝それを眺めて居ながら、さのみ心には留めて居なかつた。或日、何氣無く眺めて居ると、雀がはらく／＼と一羽飛んで來た。すると木槿の枝に來て留らうとした雀が、どうしたも

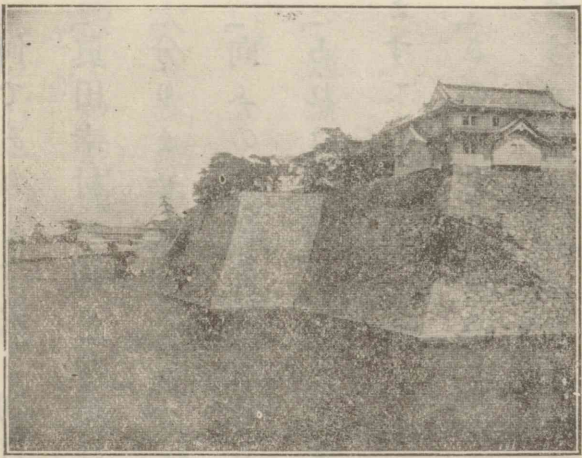
のかついとそれてしまつた。枝が動いてゐたのである。私もはつと氣が付くと、枝と一緒に白い木槿の花も、しみじみと動いて居るのを見た。ひどくは揺れてゐなかつたが、しみじみと動いて居た。風が有るなと私は思つた。雀の機縁で、始めて私の心もはつと眼が覺めたのである。さうして、私も心から其の白い木槿の花が、絶えず風に動いてゐる悲しさを識つた。それから本當に白い木槿の花をあはれだと、私の眼の底に焼付けられてしまつた。物には専心が大切であるが、其の専心をつかまへることがなかく、出來ないのである。(洗心雜話)

七 大阪城 澁川 立耳

*名は柳次郎。著述家。又大阪朝日新聞記者

日本第一の出世をした、日本第一の寛濶な殿下様が築かれた日本第一の堅城は此處大阪城。それが日本第一に早く亡びた幕府ちやから頗る妙。梅の、桃の、牡丹の、藤の、百日紅の、木槿の、山茶花の花のいろくに比べて、豊臣家は櫻の様ぢや。ぱつと咲誇つてけろりと一夜の嵐に散り果てた。源平、北條、足利、新田、織田、徳川は、本家なり分家なり、それゆかりが残つてゐて、公侯伯子男爵の華族として、今の世にも血統を留めてゐるけれども、豊臣家ばかりは、榮も、辱も、軍書の外に何ひとつ残らない、それはさつぱりしたものでちや。

第四師團の正門に差掛る爪先上り、番兵が立つてゐる。誰何する。名刺を出す。某部の某將校に面會と斷る。門を



大阪城

さつさと先に立つて行く。

潜つて右手に番兵の頭が居る處に行けと教へられる。其處で又名刺を出して用向を申し述べる。番頭が帳面を繰展げて、何か認めて、兵を一人案内に出してくれた。第二の門を潜る。電光形に幾度も曲つて行く。案内の兵は短い劍がべたくくと腰を打つ。

「もしく。」と呼べば、兵は立停る。

「何でありますか。」と切口上が、當世の武者言葉と見える。

「眞田幸村の固めた處は何處でございませう。」

「分りません。」

「向ふの石垣に穴が有るのは何でございます。」

「あれは銃眼であります。銃を託して射撃する處であります。」

「さやうでありますか。彼處から撃てば、何處までとゞきますか。」

「小銃でも二千米は有効なる射撃が出来ます。速射砲でありますと、八千米は確實なる照準が出来ます。」

第三の門を潜れば廣場が有つて、大きな役所がある。兵はわしらを立關外に待たせて、一人中に這入つて了つた。

見廻せば樹木もある、芝生もある。度々の戦争に焼けたのか、大木といふ程のものはない。石は評判通りに大きい。一つで五間も十間もあらう。仰山なものぢや。此の石一つ運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるものでない。よし何千人掛つても一日に五町とは動くまいに、此の大きな城を築き上げる夥しい石をようも寄せ集めたもの、殿下の威光といふは偉いものぢや。若しも、わしらの村で此の石一箇を百里も遠方から運ばせられたならば、三百戸足らずの瘠村では、男總出で以て二三代はかゝるに違ひな

詩人*

い。想へば恐しいことぢや。(日本見物)

八 かなりや

西條 八十*

唄をわすれた金絲雀は、

うしろの山に棄てまじよか。

いえくそれはなりませぬ。

唄をわすれた金絲雀は、

背戸の小藪に追ひまじよか。

いえくそれはなりませぬ。

唄をわすれた金絲雀は、

柳の鞭でぶちまじよか。

いえくそれはなりませぬ。

唄をわすれた金絲雀は、

象牙の船に銀の櫂、

月夜の海に浮べれば、

忘れた唄をおもひだす。(鸚鵡と時計)

九 動物の天國

上原 敬 二

動物を愛護するのは歐米人の美風である。彼等の目には、

* 林學家、
林學博士

八 かなりや 九 動物の天國

三七

獸類も人間も區別が無いらしい。彼等は飼犬の食つた皿を洗つて之に食物を盛り、平氣で自分も食べて一向苦にしない。それだけ家畜の方でも人間に親みを持つて居り、同時に温順である。我々には、動物を見るとすぐ石を投げたり、棒を振りまはす癖がある。其の證據には、各自の家庭で、縁側へ野良犬が近よつて來ると、きつと子供はしいつと追ひまくつてしまふ。誰が教へたといふのでもないが、多くこのやうな風である。これが西洋であると、先づ頭を撫てまはしてやるのである。動物の方でも、人間には近寄り易いものと思つてゐるらしい。日本に於ては、私などは、屢、犬に吠えられる方で、いつか近處の犬に吠えつかれて、マント

の裾を切られたことがある。こちらではかはいがる積りでも、犬の方が氣性があらい。所がアメリカでも、ヨーロッパでも、犬の吠えついて居るのを殆ど見たことが無い。況や噛み付かれたことなどは話にも聞かない。それに犬の喧嘩といふものを見たことが無い。

歐米では、動物虐待防止會が到る處に活動し、殊にアメリカの都市では、馬を酷使するやうなことがあるれば、重い罰金に處せられる。外國人が、日本の路傍であの瘦せ馬を叱咤してゐる状態を見ると、眞に惻隱の情に堪へないと洩してゐるのも、無理もないと思ふ。あちらの荷馬は、骨格逞しく、日本の馬の二倍位の力がありさうである。それでゐて荷が

少し重いと、二頭・三頭乃至四頭で轆かせる。加ふるに道路がよいから、いかにも軽々と轆いて行く。辻々には、馬の飲水があり、其の下には犬の飲水もある。馬の方でよくそれを知つて居て、其處へ近づくと、ひとりで行つて十分飲んで来る。

*
アメリカの黒人。

馬を馭するのは、何といつてもニグロが第一である。農耕地でも、市街地でも、實に巧な操縦をする。鞭を使ふがこれとても馬の體にあてることは稀で、空中で二三度振りまはすと、皮の摩擦でびしやり〜といふ鋭い音を發する。かうしておどすばかりで、馬はどん〜走り出す。騎馬に長じてゐるのは、メキシコ人であるが、此の點ではニグロが最

も優れて居る。

あちらの馬は、小さい子供をも馬鹿にしないで、すなほに其の命に従ふから可愛い。小學校へ二三哩もあるといふ田舎へ行つて見ると、農家の事として、小さい馬車は幾つもあるので、それに子供が乗つて、自分で手綱を取つて、馬車で通學する。學校へ着いて、運動場の隅に出來て居る厩に繋いで置くと、授業時間中は、小使が草を食はしたり水をやつたり世話してくれる。さうして放課になると、又小さい馭者は、之に乗つて歸つて行く。慣れた馬になると、馬の方でわざとぬかるみを通つて、馬車を道のよい方へ通すやうな利口な事もする。

乗馬では、あちらの馬は人を乗せるので、人が馬に乗るのではない。公園へ行つても、歩道、車道、騎道の區別があり、砂の足當りのよい騎馬道を乗り廻はす、壯快さは忘れられない。あちらでは、牛を輓用としては用ひない。田舎で放牧してある牛が、其の邊を通る汽車に轢き殺されることがあると、飼主は皮を剥いて持つて行き、それを證據として損害賠償を取ることが出来る。従つて、放牧地でも、鐵道線路に沿うて木柵を作り、處々に木戸を設けるが、此の木戸を開け放しておいたものは、五千ドルの罰金を取られる事になつて居る。それだけ牛の命を大切にする。もう一つ珍しいのは、公園に居る栗鼠の類で、草原の上、樹の

*米國ワイオミング州にある黄石公園。東西三十二里南北二十九里半の廣さ。

根のまはりなどに、あの豐滿な尾を振上げて、ちよこくとあるきまはり、落花生や豆粒など持つて居る人の傍へ寄つて來て、肩の上に乗し、膝の上に抱かれ、手の中のものをおもむく鳥もよく人に馴れて、日曜日などは、子供が何かしら食物を持つて、公園に放し飼にしてある鳥にくれにいく。公園で動物を飼つてゐることは、中々盛んで、動物園は何れも無料で、時間に制限なく見せる。動物舎の構造など實に壯大なものである。シカゴのリンカーン公園、ニューヨークのブルックス公園などは、寧ろ贅澤すぎる位で、動物を大切にすること至れり盡せりである。
*エイロストーン国立公園でテント生活をしてゐたことがあ

る、するとテントの下から、無数のウードチャック(山鼠)が、滑稽な顔附で四つん這に出て来ては、投げてやる落花生を食べ歩く。こんなおとなしい動物ばかりでなく、此の公園には熊が放し飼にしてある。澤山は居ないが、運がよいと道傍へ出て来て、あの大きな體を上げて、ちんくの姿をし、車の上から手にのせて與へるパンを舌で舐める。人が寄り添つても少しも危害を加へない。私は滞在中、せめて一度は見たいと、森林のなかや草原を歩き廻つたが、不幸にして逢へなかつたのは遺憾であつた。此の外、野牛や海狸や鹿などを始として、色々な動物が此の六十哩四方の大公園の自然界に幸福な生活を營んで居る。都市公園では、制札の

數は一體に少いが、花木を折るべからず」と云ふやうなものも、園内の鳥や小動物をいちめると罰金」といふ制札の方が遙かに多いのを見ても、如何にも動物にとつての天國であると思はれる。

私が明治神宮内苑の植栽事業に關係してゐたのは、丁度大正四年で、當時内苑には出入する人も少く、園内は極めて静寂であつた。毎日午後五時ごろ事務所から引上げて歸るとき、今の社務所附近の舊道路に、狸が四五匹遊び戯れてゐるのをよく見かけたものだ。是は道ばたの排水用大土管の中に棲んでゐるので、人無き時を見計らつて路傍へ出て遊ぶと見える。然るに憐むべし、心なき人夫どもに見つけ

られたが最後、土管の中へ松葉燻しをかけられて、到頭四匹のうち三匹まで生捕られて遂に胃の腑の中へ棲みかへさせられてしまった。

逃げおほせた他の一匹は、暫くは孤獨な生活に泣いて居たであらうが、後に我々が生捕つたので、これは、各地産の狸を十數匹集めて、我が子の如く愛育して、一時は狸博士と云はれた、農科大学の川瀬^{*}林學博士のもとへ贈つたのであつた。神苑に動物を飼への、公園に小鳥を殖せのといふ論のやかましい今日此の頃、大學の小屋にをさまつた、此の狸先生の皮肉な愛嬌顔が目に見るやうである。人を見て動つたり、人が動物を愛すれば、動物も人に懐く。人を見て動

^{*}名は善太郎。

物が逃げるといふのは、人が動物につらいからである。我は愛禽獸に及ぶまでの同情を持ちたいものである。

(わたり鳥の記)

一〇 瓜生岩子

^{*}金子元臣

瓜生岩子の慈善は、貧者、窮者に對して單に財物を施すのでなく、其の本に培ひ、心を救つたのである。明治二十一年この方、會津地方に毎年洪水があり、米價は彌増しに騰貴して、細民の難澁一方でなかつた。

岩子は借財までして、救助に骨折つた。この折、ふと水飴の製造法を改良し、從來全く廢物としてゐた飴の搾糟で、一種

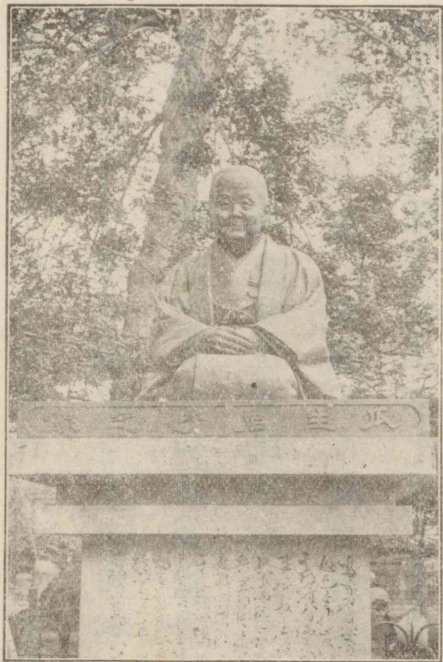
^{*}國文學者。御歌所寄人。國學院大學教授。

の立派な食品をつくることを發明した。これが爲に飢を免れた者が數知れずにあつたといふ。一體岩子は常に節儉を旨とし、自分の衣食は唯飢寒を凌ぎ得れば足れりとし、世の廢物は、どんな物でも工夫して有用の物とすることを心掛け、平生心を細かな事に配り、些細な物をも捨てなかつたが、到頭この發明を成し遂げたのである。

明治二十三年の頃、東京養育院から招かれて、幼童の世話掛となり、其の心を籠めて造つた飴糟臺の菓子^(三)を皇后陛下に奉つた。ところが、畏くも「御満足」との令旨を賜はり、その上、九重の大奥に召されて、多くの女官達に、飴糟から菓子を製造する方法を傳授するといふ光榮を得た。

^(二) 東京小石川區にあつた。今は府下板橋にある。
^(三) 昭憲皇太后。

徳、孤ならず、岩子の徳行を慕ふ者が故郷に段々殖えて、岩子を會津へ迎へたいといふ聲が、次第々々に高くなつて來た。それで、岩子は遂に故郷に歸つて、各郡に育兒所を立てたり、



(圖公草淺) 像の子岩生瓜

又、若松市に慈惠病院を設けたりした。その後、瓜生會といふ會を創めて、普く縣下の人に飴糟の利用法を傳授したので、縣民は頗る其の益を受けた。この上は、この方法を廣く全國に傳へようといふので、明治二十七年また上京して根岸の里に

* 東京市下谷區に在る。

住居を定め、自ら賄費を辨じ、多くの入費を出して多くの人にこの法を傳授した。

程なく二十七八年戦役が起り、世間は皆恤兵・後援の事に忙しく、岩子も手の届くかぎり奉公に努めたが、この慈母の眼に絶えず哀と映つたのは貧民の情態であつた。戦争以來、日にまし寒さに泣き飢を訴へる聲が耳について、夜の目も合せられぬ。救済のことを有志の誰彼に謀つたが、折が折とて、心に任せぬ事ばかり。とつおいつ、思案に暮れたが、或時、焼芋屋の前を通つて、ふとその切屑が籠に澤山積上げてあるのを見、豚の餌食になる位が關の山で、多くは廢物となるのを残念に思ひ、何がなと工夫を重ね、種々の經驗を経て、

遂にこれから飴をつくり、又、焼酎や葛粉を拵へ、その糟でかて飯を炊ぐ方法を發明した。これも亦、世間一般の人に告げ知らせて傳授したので、今では之を職業として生計を立て、居る者が少からずあるといふ。實に皇國の廣き、行末の長きを考へれば、この爲に食を得るものが幾萬人の多きに上るか料り知られぬ。さて、この芋飴を赤十字社病院で分析して見たところが、誠に結構な滋養品であつたので、岩子は大いに喜び、陸軍衛戍病院・赤十字社・育兒院等に贈つて、施にした。

又、この役の折、畏くも時の皇后陛下を始め奉り、女官・貴婦人方は宮中で繙帶卷をなされたが、その裁屑が積んで山をな

土方久元夫人。

西郷従道夫人。
大山巖夫人。
土方久元夫人。
榊山實紀夫人。
三島彌太郎夫人。

した。その裁屑は土方伯爵夫人の盡力で、殊に岩子に御下附の事になり、宮内省の馬車で、根岸の住宅に送り届けられた。岩子は思も掛けぬ恩恵に浴し、この千載一遇の時に、大御手を觸れさせられた物を賤しき身に拜受した上は、後日の記念となる物を造り、子々孫々に天恩の廣大なるを語り、継ぎ言繼ぐ料としよといつて、苦心の末、之を解きほごして、絲にし、再び之を織立て、皇后陛下の御歌を染出して記念織と名づけた。そして、猶これを、軍人の寡婦で貞節ある者、或は婦徳の世に秀でた人に贈つて、一は哀悼の情を表し、一は後世の鑑にしよといふので、西郷・大山・土方・榊山・三島等の諸夫人に謀つて、東京瓜生會といふを設け、かの記念織

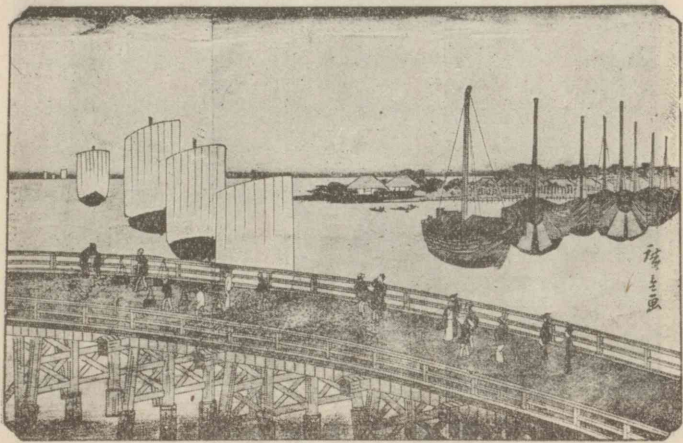
に銀杯を添へて、府縣知事の手を経て贈つたものが、全國で三千餘、残りには神社・佛閣に納めた。皇國の爲、國民の爲、教育の爲、岩子の考案は實に立派なもので、後の世に及す影響は、尠からぬ事であらう。(新體婦女鑑)

二 永代橋

深川富岡八幡宮の神事は、江戸にては山王・神田の兩祭に次ぎての祭禮なりき。文化四年八月十五日、其の神殿新に成り、三十餘年間中絶したりし祭禮を行はる。氏子各町の意氣込大方ならず。各、競うて山車を出しなす。

この事早くも府内の評判となれる折柄、深川靈岸町には、身延山の開帳ありければ、當日の雜沓さこそと思ひ遣らる。待ちに待ちたる十五日は、生憎の雨天に延期となり、愈十九日祭禮は舉行せらる。此の延期の爲に人氣は一層盛になりて、府内の老若男女、早朝より我も我もと永代橋の方へ押行く。

晝すこし前ごろ、橋下を通る貴人の船あり、番人、繩を橋の袂に張りて、一切諸人の通行を許さざること小半時。此の間北より、南より、橋の西詰に來り集る者、宛ら雲霞の如し。やがて番人の繩を引くと齊しく、待侘びたる幾千萬の大衆、潮の涌くが如くに、どつと橋上に押寄せす。折も折、一臺の山車



水代橋(廣重筆)

橋東を通過すれば、橋上の男女、それ山車と、わつしよく、足を空に押行く。細く長き假橋の争でかかばかりの重量に堪へ得べき、忽ち橋の東詰一間を殘して長さ十二間許り、めりめりと二つに折れて、どつと水中に崩れ落つ。數百人の男女橋と共に轉び落ち、浮きつ沈みつ悲鳴を揚げて救助を叫ぶ。橋上の男女、これはと驚きて引返さんとす。されど跡より、押寄せ來りて、止めんに由

なく、續いてぞろ／＼と落込む者夥し。此の日より翌日に

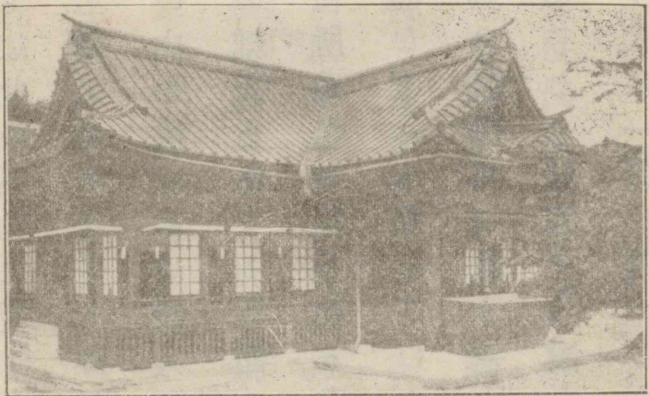


深川八幡祭の禮

掛けて、溺れしものを引揚げたるは、總數實に七百八十人、其の内、四百四十人は遂に蘇生せざりきといふ。

永代橋の墜落に就いては、種々の悲劇と與に、種々の喜劇もありき。本郷に住める麴屋の主人、祭禮を見んとて、兩國橋の此方、米澤町より村松町に差懸りし時、ふと心付けば、懷中の紙入、何時の間にか紛失して見えず。「我は掏兒

に取られしならん、二兩二分の金、取られては祭見ても詮な



富岡八幡神社

し。と思ひ、本意なくも、其の儘歸宅して自棄半分に打臥せり。夕方に至りてふと目を覺せば、人々の語り罵る聲々耳にかしまし。怪しみ問へば、永代橋の墜落にて、時刻は恰も我が渡りたるべき刻限に當れり。

僥倖にして死を免れたるを喜びしに、翌日、突然、奉行所より、主人の死體引渡すべければ、早々出頭すべき旨の命あり。合點行

かずと出頭し、自分は此の通り存命なる由申し立つれば、然らば此の品物に覺無きか。」と彼の紙入を示さる。改むれば二兩二分の金子も昨日の儘なり。主人は、昨日掬られし事の由を述べれば、役人は横手を打ち、それにて讀めたり。此の紙入、あれなる屍體の懷中に在り、中を検すれば、其の方の住所氏名を記したる書付のありたれば、正しく其の方の屍體ならんと思ひしに、さては、彼の者、其の方の紙入を掬取り、其の儘深川へ赴く途中橋梁墜落の爲、横死を遂げたるものならん。好しく、懷中物は其の方に下げ遣はず。」といはる。主人は一命は助かる、金子は戻る有難しく、とて其の冥加を喜びたりといふ。(江戸懷古録に據る)

(二) 文學者。蘆花を號す。

(三)(四) 作者の居村千歳村の字。東京府北多摩郡。

二三 村の秋

徳富健次郎

秋は農家の祭日、大事な交際季節である。風の心配もどうやらかうやら通り越して、まづ收穫の見込がつくと、何處の村でも祭をする。木戸錢不用千客萬來の芝居、お神樂、それが出来なければ、詮方なしのお神酒祭。今日は粕谷、明日は廻澤、烏山は何日で、給田は何日と、皆が指折り數へて浮立つ。彼方の村では太鼓が鳴る、此方の字では舞臺掛け。一村八字寄合つて、大きくやればよさうなもの、八つの字には八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の烏山は素より、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家

の祭をしなければ氣が濟まぬ。祭となれば、どんな家でも強飯を蒸す、煮染を拵へる、饅頭を打つ、甘酒をつくる。そして、他所の親類縁者を招く。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の糞だらけの鎮守の宮も、眞黒になるほど人が寄つて、小間物屋・菓子屋・鮓屋・おでん屋・水菓子屋などの店が出る。神樂は村の能狂言、神職が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵な鐵さんが、氣輕に太鼓を打つたり、氣輕な龜さんが、髮髯蓬々とした面を被つて、眞面目に舞臺に立ちほだかる。「あゝありや龜さんだと、まあ」と可笑盛りのお島が笑ふ。「今日自家の祭に酒に酔うた仁右衛門さんが、明日は透綾の羽織でも引つ

かけて、寸志の紙包を懷中して、隣宇の芝居へ出かける。毎日近處で顔を合せて居ながら、畑の畔の立話にも、「今日は。」「今日は。」と抑、天氣の挨拶からゆる／＼と始める田舎氣質で、仁右衛門さんと、隣村の幹事の忠五郎さんとの間には、芝居の科白の受取渡しよろしくと云ふ挨拶が、鄭重に交換される。輪番に主になつたり客になつたり、呼びつ呼ばれつ、祭は村の親睦會である。祭が繁昌すれば田舎は長閑である。稲の秋となる。地は再び黄金の穂波にあかるく照り渡る。早稲から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。赤蜻蛉が夕日の空に數限りもなく亂れ飛ぶ。柿が好い色に照つて来る。ある寒い朝不圖見ると、富士の北

の一角に白いものが見える。
 雨が續く。雜木林に茸が出る。野ら仕事をせぬ腰の曲つた爺さんや、赤兒を背負つたお春つ子が、杖を抱へて採りに来る。檜茸・しめぢ、稀には紅茸、初茸は滅多にない、多いのが油坊主と云ふ茸だ。一雨々々に氣は冷えて行く。田も林も日々色づいて行く。茶の花が咲く。雜木林の檜にからむ自然生の蔓の葉が黄になり、藪からさし出る白膠木が眼ざむる様な紅になつて、お納戸色の小さなコップを幾つも列ねて龍膽えんたうが咲く。(みゝすのたはごと)

*國文學者、
 歌人。
 明治四十三年歿す。

一三 おとゝえ

*大和田建樹

一

夕日かけ 里をわかれて、
 松の上に なほぞやすらふ。
 今日ひとひ 小田におりたち、
 刈りし稻 たばにつくりて、
 負ひもちて、 家路にはこぶ
 賤の女が おとゝえつれて
 歸りゆく 方も知られて、
 うちまねく すゝきの奥に
 烟たなびく。

二

沈む日の	なごりも消えて、
うす墨の	ゆふべの色に
つゝまるゝ	遠のひとむら。
ほの見ゆる	焚火のかげに、
おとゝえの	少女、ちゝはゝ
むつまじく、	神のめぐみの
箸とりて	夕けやすらん、
圍爐裏火に	柴折りくべて
あたゝかに	圓居やすらん。
刈りのこす	稻穂のうへに
風寒く吹く。	

一四 卑下

脈

ある處に我が身をむやみに卑下する下女あり。その家の内儀、風を引いたりとして、常にねんごろなる醫者を呼びて、脈を見て貰はるゝ序に、下女を呼びて、「そなたも心地がすぐれぬといやる。先生に見て貰ひなされ。」といへば、かの下女例の卑下して、なんの私等風情に脈がござりませう。」というた。(輕口浮瓢筆)

傘

傘を張りならひ、七八本張上げしが、油引いてから一本もす

ばまらず。これはつまらぬとむりに疊めばはりくと裂ける。どうしたものでちやと困りしが、折柄の夕立。「しや、よい思付がある。」と、傘をひらいたまゝ、辻へ持つて出で、それ廉い、負けた、と賣りかけしに、何が、俄雨のことなれば、大勢集り、ばひあふやうに買うてゆく。「こりや、うれしや。」と内へ走り歸り、思付をやつて傘を残らず賣つて來た。といへば、隣の人が、「それはよかつた。いくらに賣つたぞ。」南無三、餘り急いで錢をば取らずにやつた。」(落語選)

壺

粗忽者壺を買ひにいつた所がうつぶけてあるを見て、此の様な口の無い壺があるものか。」と云ひながら、ひつくりかへ

して、「これく、底も抜けて居る。」(落語選)

一五 頓智救命

1167-1216

ロンドン(ロ)の東南六十二哩ばかりの處にある。

昔、英國に、(ロ)ジョンと申さるゝ王ありけり。性残忍にして、思ひやりの心なかりき。その頃、(ロ)カンタベリーの町に、老僧正あり。壯麗を極めたる僧院に住し、驕奢至らざる所なく、日百人の貴人を集めて饗應し、華美に装ひたる武士をして侍らしめたり。

ジョン王これを聞きて大いに怒り、僧正を召し、叱して曰く、「朕が領内に在るものは、何人たりとも朕に勝れる生活を爲すべからず。汝これを知らざるか。」僧正對へて曰く、微臣

只樂みを朋友にわかたんと欲するのみ。且、臣は臣が所持の物を費すのみにて、少しも累を他人に及すにあらず。」と。王、聲を勵まして宣ふやう、凡そ朕が國土にあるものは、一として、朕が所有たらざるはなし。汝、今朕が物を費し、朕に勝れる生活を爲す。思ふに、汝は朕が位を奪はんと欲するなるべし。」僧正惶懼して、否、臣何ぞ異志を抱き申すべき。」と述べ、る言葉もくごもりたり。

王聞きも果てず、だまれ、僧正。汝の罪は明白なり。命惜しくば、朕が三つの間に答へよ。答若し誤らば、身首處を異にし、所有の物は一切没收せらるべし。」と宣ふ。僧正、奉答し得べしや否やは測られねど、願はくは、試みさせ給へ。」と申す。

ロンドンロンドンの西凡そ六十三哩テ、△ス河の左岸にある。
ロンドンロンドンの東北五十八哩の處にある。

「然らば、問はん。一日以内に答ふべし。朕が壽命は何時盡くるか。これ一つ。朕、馬に騎りて一日のうち、世界を一周せんと欲す。何程の速度にて走らば可なるか。これ二つ。朕は何を思へるか。これ三つ。」僧正驚き惑ひて、聖旨深遠なれば、一日以内には對へ奉り難し。かしこけれども、大王、仁愛天の如く、寛大海の如し。願はくは、二週間の猶豫を賜へ。」と哀願しければ、王これを許しぬ。

僧正御前を退き、憂慮措くこと能はず。馬をオクスフォードオクスフォード大學に馳せて、學者の智慧を借らんとせしが、皆首を振りて曰く、われらの講ずる書には、王の問に對ふべき答なし。」と去つてケンブリッヂケンブリッヂ大學に至りけれども、亦同じ、僧正失

望いはん方なく、死を期してすごとくと馬首を回らしけり。枯木の梢に鳴く鳥、草むらにすたく蟲、見るもの聞くものにあはれを催して、たそがれのかねの音幽かに響く時、僧正はわが家に近づきたり。と見れば、此方に來るはわが牧場を管理する牧人なり。僧正を見て、臺下、今歸り給へりや。王宮には如何なるよき事か候ひつる。といふ。僧正は、悲惨悲惨。と叫びて、ありし次第を物語りぬ。

牧人はいと憐がりて聞き居たりしが、やゝありて「愚者も賢者に智慧をかす。」といひも果てぬに、僧正思はず聲高く、汝に如何なる智慧かある。とく語れ。と宣ふ。さればなり。人みな某の風采を臺下に肖たりといふ。臺下、しばらく某が

臺下の服裝を擬するを許し給へ。某直ちに都に上り、王に謁を乞ひ、奉答を試むべし。事若し成らずば某が命を失はんこと固より悔ゆる所にあらず。と、誠心面に溢れたり。僧正大いに喜びて、事を託しつ。こゝに於て、牧人は法衣を纏ひ、僧冠を戴き、錫杖をつきて立ちければ、あつばれまことの僧正とこそは見えたりけれ。

この僧正、やがて倫敦に行きて、王に謁見す。王嚴かに宣ふやう、いかに、僧正。然らば、第一問に答へよ。僧正かしこまりて、陛下よ。畏くも、陛下は崩御の日まで御命を保ち給ひ、それより後は一日もながらへ給ふべからず。最後の御息を引取らるゝ時に崩御ありて、それよりは一分たりともこ

の世におはしますことなし。」と申したり。王は笑ひて、「汝は巧にも申すものかな。然らば、この問はそれにて可なりとせん。第二問は如何に。」僧正徐ろに申すやう、陛下、日出に起きいでたまひて、太陽が明朝東天に昇る時まで太陽と同行せさせ給へ。二十四時間にして世界を一周し給ふべし。」王大笑して、實に然り。汝は賢きものなり。これも可なり。然らば、次はいかに。」こはいとやすき御問なり。陛下は臣をカンタベリーの僧正とおぼしたまふなり。」と對へて、さて申すやう、臣は只賤しき牧羊者なり。願はくは、寛大なる大御心をもつて僧正並に微臣の罪をゆるし給へ。」といひつゝ、法衣を脱ぎすつれば、全く似而非僧正なりければ、王

は驚きあきれて、言葉なし。やゝありて、「汝は面白き男なり。」とのまひて、この牧人に褒美の金を取らしめ、僧正をも免しければ、牧人は喜び勇みてカンタベリーにぞ歸りける。

一六 貨幣礫

三 浦修吾

西班牙のバルセロナから伊太利のゼノア(三)に向けて出帆した一艘の汽船があつた。船中には佛蘭西人・伊太利人・西班牙人・瑞西人などが乗つて居た。その中に十一歳になる一人の少年が居た。みすばらしい身なりをして、野獸の様に獨り人を離れて、打沈んだ眼附で人をじろくく見て居た。彼がこんな眼附をするのも無理の無い事だ。今から二年

(一) 教育家。
 評論家。
 大正九年歿す。
 (二) 西班牙の東海岸の北部の港。
 地中海に臨み佛國の西境に近い處。
 (三) 伊太利の西海岸の北寄りの港。地中海に臨み佛國の東境に近い處。

以前に、伊太利の田舎に百姓をして居る彼の兩親が、彼を輕業師の一行に賣渡した。その一行は、彼を撲つやら、蹴るやら、ひもじい目にあはすやらして藝を教へ込み、佛蘭西や西班牙あたりを引張り廻し、始終打擲して食物も十分に與へてなかつた。一行がバルセロナに着いた時、彼は虐待と飢饉とに堪へ切れないうで、到頭遁げ出して仕舞ひ、伊太利の領事館に行つて保護を求めた。領事は深く同情して、彼をこの汽船に乗せてやり、ゼノアの出納官に宛てた紹介狀を渡してくれたのである。そこから、無慈悲な兩親の許へ送り歸して貰ふ都合なのだ。少年はあそこゝに傷を受けて居て、非常に衰弱して居た。二等室に乗つて居るので、人々

が不思議に思つて、彼を眺めて居た。人が物を言つても返事もしない。すべての人間を悪み厭ふ様に見えた。かくまでに彼の心はひがんで居たのであつた。三人の乗客が色々と問ひ試みて、やうやく彼の口を開かせた。彼は伊太利語に佛蘭西語と西班牙語との雜つた無器用な言葉で、概略その身の上を物語つた。この三人は伊太利人では無かつたが、彼の言ふことが分つたので、半分は同情からと又半分は酒に酔つて居たからとて、金を少しばかりくれて、猶話をつゞけさせた。その時大勢の婦人達がその室に入つて來て、少年の話聞いて、彼等は人に見えるやうにして、いくらか金を出して、これをやらう。「これもお取

り。」と言つて、食卓の上にならなくと投出した。少年は低い聲で禮を言つて、金を皆ポケットに入れた。苦み切つた顔の上に始めて嬉しさうな笑みを見せた。それから彼は自分の寢所にはひつて、幕を引いて靜かに横たはつて考に耽つた。此の金があれば、船中でおいしい物を買つて、二年間も飢ゑて居た腹をこやす事も出来るし、ゼノアに着いたら、上着を買つて、襪襦を脱ぎ棄てる事も出来る、又金を持つて家に歸れば、無一文で歸つたよりは、父母から少しは人間らしい待遇を受けることも出来るのだ。此の金は彼に取つては一かどの財産であるのだ。彼は寢所の中でこんな事を考へて快い思に耽つて居た。

その時まだ、かの三人の旅客は二等室の食卓を取巻いてしやべつて居た。彼等は酒を飲みながら、旅行中に見た國々の話をして居るのである。

話は遂に伊太利の事に及んで、一人は伊太利の宿屋に對して不足をいふ、一人は汽車を攻撃する、だんく酔がまはるに連れて、彼等は何もかも悪しざまに言ひ募るやうになつた。伊太利に行くよりか北極にでも行つた方がよいといふ。伊太利には騙詐者や追剥が居るばかりだといふ。しまひには、伊太利の役人は字も知らないと言つて罵る。「無智な國民だ。」「下等の國だ。」「ぬす……」

一人が、今や盜賊と云はうとして言ひも終らない中に、銀貨

銅貨の礫が、雨の様に彼等の頭の上や肩の上に落ちて來た。そして恐しい音をして、食卓の上に飛んだり、床を轉つたりした。三人の旅客も憤然として起き上ると、又一つかみの銅貨が彼等の顔に打ちつけられた。

「持つてうせろ。」少年は寢所の幕の間から顔を突き出してどなつた。「おれの國の悪口いふ奴等からは、何貰ふかい。」

(愛の學校)

*名は常規。伊豫松山の産、新派俳句の首唱者。明治三十五年歿す。

一七 幼時の美感

正岡子規

極めて幼き時の美は、唯色に在りて形にあらず、まして位置・配合・技術など、其の他の高尚なる複雑なる美は固より解す

べくもあらず。其の色すらなべての者は感ぜず。あつぶはすもる

(美麗)と嬉しがらるゝは、必ず赤き花やかなる色に限りたり。

乳呑子の燈火を見て無邪氣なる笑顔を作りたる、四つ五つ

の子が、隣の伯母さんに見せんとていと嬉しがる木履の鼻

緒、唐縮緬の帯、何れ赤ならざるはあらず。試におもちや屋

の前に立ちて赤の交らぬ者は何ぞと見よ。白毛、黒毛の馬

のおもちやにさへ、赤き臺の車はつけ有るべし、何てあつたかと思ふ

我が幼き時の、美の感じは如何にやと思ひ廻すに、五六歳以

下の事は、記憶に残るべき道理無し。我が三つの時、母は我

を連れて十町ばかり隔りたる實家に行きしが、一夜は其處

に宿らんとて稍寐入りし頃、火事々々と呼びて外を通る聲

身に染みて夢覺めたり。すは火事よとて起き出でて見る

一形、つまきいゆお共
 二般よこれ外のおい
 三、面よこれいゆお共
 四、用よこれいゆお共
 五、は新用社の大徳家
 六、その他、いゆお共
 七、いゆお共、いゆお共
 八、いゆお共、いゆお共
 九、いゆお共、いゆお共
 十、いゆお共、いゆお共

る美に浮かれて、はいくばいく(提灯)と躍り上つて喜び

子 規 の 筆 讀
 に、火の手は西南に當りて盛に燃
 え上れり。我が家の方角なれば、
 氣遣はしとて、我を負ひながら急
 ぎ歸りしが、我が住む横町へ曲ら
 んとする瞬間、思ひ掛け無くも猛
 烈なる火は我が家を焼きつゝあ
 りと見るや、母は足すくみて一歩
 も動かず。其の時背に負はれた
 る我は、風に吹き捲く焰の偉大な

たりと母は語り給ひき。飽くまで慘酷なる猛火に對する
美感は如何にありけん、此の時以後再び感ずる能はず。

我が家は全焼して僅に門を残したるほどなりければ、さな
 くとも貧しき小侍の家には、我をして美を感じしむる者何
 一つあらざりき。七八歳の頃には人の詩稿に朱もて直し
 あるを見て、朱の色の美しさに堪へず、吾も早く年とりて、か
 かる事したしと思ひし事もあり。こればかり焼け残りた
 りと云ふ内裏雛一對、紙雛一對醜く大きな這子様一つを
 赤き毛氈の上に飾りて三日を祝ふ時、五色の色紙を短冊に
 切り、芋の露を硯に磨りて、庭先に七夕を祭る時、此等は一年
 の内にて最も楽しき嬉しき遊なりき。妹のすなる餅花と

て、正月には柳の枝に手毬つけて飾るなり。それさへもいと嬉しく、自ら針を取りて手毬をかゞりし事さへあり。昔より女らしき遊を好みたるなり。或時東京に行く某の人に歌ガルタを頼みけるに疾く送りこされぬ。此のカルタ好き品にて、我家には過ぎたりと人皆云ひしが、其カルタ痛く我が氣に入りて、年々の正月を待ち兼ねたり。相手無き時は自ら讀み自ら取りて樂みとす。十二三の頃友に畫を習ふ者あり、羨しくて母に請ひたれど、畫など習はずともよからんとて許されず。其の友の來る毎に畫を描かせて僅に慰め居たり。幼時より美に感じ易かりし吾は、我が家の長物一として美

人の便の方
の幼時の美感

自然の美

長物に対して獨りとした

とすべき物無きを見て心に樂まず、如何にして、吾は斯る貧しき家に生れけんと思ふに、常に他人の身の上の妬ましく感ぜられぬ。獨り造化は富める者に私せず、我が家を周る百歩ばかりの庭園は、雜草雜木、四時芳芬を吐いて、不幸なる貧兒を憂鬱より救はんとす。花は何々ぞ。南受けたる座敷の庭には、百年をも過ぎたらん櫻の樹はびこりて、庭半ばを掩へり。稀なる田舎には珍しき大木なれば、彌生の盛りには路行く人足をとゞめて、かにかくと評し合へるを、吾はひそかに聽きて、いと嬉しく思ひぬ。やからうから打寄りて、花の下に酒もりするも亦榮ある心地す。

櫻の下に石榴あり。花石榴ワケナとて、花は稍大きく八重にして實を結ばず。其の下の垣根極めて暗き處に木瓜カク一もとあり、一尺ばかりに生ひたれど、日當らねば花少く、或年は二つ三つ咲く、或年は咲かず、たま〜咲きたるはいと床しかりき。椿あり、つゝじあり、サフランあり、水仙あり、庭の隅に瓦造りの祠を建て、其の下には菖蒲しやがなど咲きて土常に濕へり。書齋の前の蘭は自ら土手より掘り來りて植ゑしもの。

北庭は狭し。芍薬一本、我が庭園中の最も艶なる物なり。天竺草テンシクサ薄荷ハコウなどあり。

西は家の裏にして畠なり。家に近く蠶豆豌豆など一畝二

畝植ゑたるが、其の花を見れば心そゞろに浮き立ちて樂しさ云はん方なし。南瓜カボチャの蔓溜壺に取りつきて、大きな仇花に蛇ヘビの絶えざるも善し。梨一本、梅一本あり。梅は薄紅梅なり。

東は井戸端なり。きたなき泥溝あつて、鳥兜は水溜りを圍みて咲きたり。桃の若木あり。菊一畝ありて、小菊ばかり植う。

春風暖かに菜の花に蝶飛ぶ頃、多くの童男女打交りて、南の野へ摘草に行くはこよなく嬉しき遊なり。

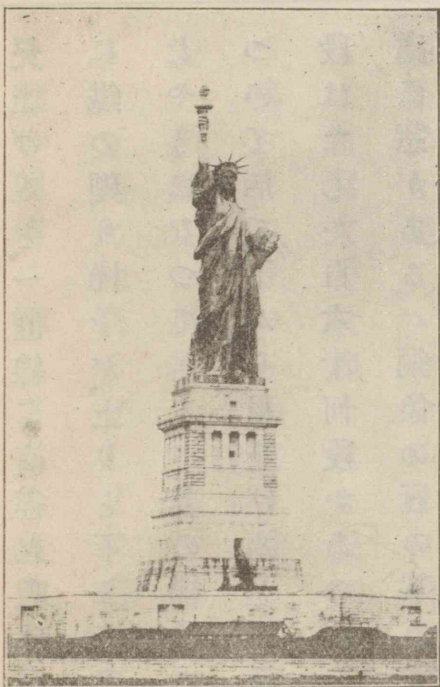
春は我が世界にして、草花は我が命なり。幼き時より今に至るまで、野邊の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾

を神ならしめんとする事あり。殊に怪しきは我が故郷の昔の庭園を思ひいだす時、先づ我が眼にうかぶ物は、爛漫たる櫻に非ず、妖冶たる芍薬にも非ず、溜壺に近き一畝の豌豆と蠶豆の花咲く景色なり。如何なる故か自ら知らず。若し小さき神の此の花に宿りて吾を悩まし給ふらんか、いと覺束なし。(子規遺稿)

〇一八 自由の神

外に出ると寒いし、内に居ると窓が低くて、只海面が見えるばかり。せうことなしに讀みふるしの新聞を眺めて居ると、かたんと船がつく。自由の神の像がぬつと眼の前に峙

つといふよりも、臺石が絶壁の如く面に當る。餘程離れてそりかへらぬと神の像は見えない。今更高的のに驚く。カーキ色の番兵が寒さうに突立つて居る前を通りぬけて、牢獄のやうな臺石の内側へ入る。小さな厚い窓から、黄色



自由の神の像

な光線が斜に黒ずんだ石の壁を照す。自分の足音にもぞつと進むと、其處に昇降機がある。見物人が五人乗ると、すうと上る。たしか五階まであつたと思ふ。

つまりこれだけが臺で、其處からは階段を上らねばならぬ。見上げると、一直線に直徑二呎位の柱がずつと通つて、それに鐵の廻り梯子が、上りと下りと、二條の大蛇がからみついたやうになつて居る。其の梯子には十段目毎位に電燈がついて居て、下から見上げると一種の偉觀である。此の階段はたしか百六十何段かあつたと思ふ。漸く上り盡した處に窓がある。銅像の冠の下のぎざ／＼した處に當るの
で、下から見ると、冠の針の様な後光が、柱の如く天に沖して見える。今更大きいのに驚く。
此の像を造つたアウガスト、パールゾルヂと云ふ佛國の彫刻家は餘程變つた人と見えて、始めて紐育へ着いた時、甲板の

上から港を眺めて、こんな事を考へた。便船毎にこんなに澤山の移民が、此の自由の新天地に新運命を開拓せんとしてやつて來る。然るに、此處に彼等新國民を接待する何等の設備もないのは遺憾である。もし此處に一つ、何か一大銅像でも建て、一つには自由の新天地たる象徴とし、一つには新渡來者歡迎の意を表す事にしたならば、長い間海上に揺られて、やつと此處に着いた彼等に、言ふべからざる慰安と激勵とを與へるに違ひない。と。是が即ち此の像を造るに至つた動機で、パールゾルヂは、それからすぐ佛國に歸り、一般の同情に訴へて二十萬弗の金を募り、やがて佛國民の名を以てこの銅像を建てるに至つたのである。

敷地についても随分苦心したが、つひに此のヘッドロー島を選び、愈千八百七十九年に工を起した。固より像だけの高さが百五十呎もあるのだから、逆も鑄るわけには行かぬ。已むなく木の模型を拵へてそれを三百に細かく割り、其の割つた模型の上に銅板をあて、全部打抜き細工で作り上げた。尤も像全體の土木的設計は、巴里のエッフェル塔を建てた有名な技師エツフェルの設計ださうな。像は自分の母を象どつたといふ事であるが、ともかく技藝家として、獨力で是だけのものを建てるといふは恐らく類があるまい。此の像を仰ぎ見るものは、誰でもバースolzの偉大なる精力を思はずにはゐられないであらう。(紐育に據る)

(二) 名は芳衛。國文學者。

(三) 吉良上野介義央。

(三) 大石良雄。

(四) 良雄の長子。

一九 泉岳寺

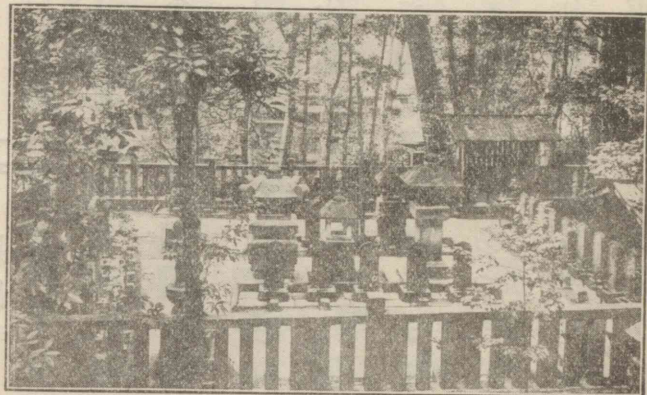
大町 桂月

上野介の首は獲たり。四十七士の志は遂げたり。吉良邸の裏門にて銅鑼を鳴らして人員を點するに、一人も缺くるものなし。上野介の首を擁し、隊伍を整へて、回向院に至り、休息せんとせしに、住持拒んで入れず。直ちに泉岳寺さして繰出す。飽くまでも落着きたる態度なり。かばかり落ちつきても、なほ一つ手ぬかりありき。吉良邸の燈火を消すことを忘れたることなり。火事起りては大事なりとて、内藏助これを大高源吾、富森助、右衛門の兩人に命ず。これには餘程の膽勇を要す。而して、これは大石主

税の發言にかゝれりとも傳へらる。

芝區芝口にあり

播州赤穂城主淺野長矩



墓の士七十四

匠頭の墓前に供へし時の心中や如何なりけん。その井は

首洗井と稱して、今もなほ墓地の入口にあり。いと淺き井なり。

内匠頭の墓の前に一同香を供へ、各自ら名乗りて拜謁す。終りて、内藏助進んで短刀を墓上に置き、その刃を外に向く。かくて、祭文を讀上ぐ。

元祿十五年午十二月十五日、唯今面々名乗り申す通り、大石内藏助始め、御足輕寺坂吉右衛門迄都合四十七人、死を盟ひし臣等謹んで亡君の尊靈に告げ奉り候。去年三月十四日、尊君上野介殿を御刃傷遊ばされし御事、私共その仔細存じ奉らず。然る所、尊君御生害、上野介殿御存命、御公裁の上私どもかくの如きの企、尊君の御

心にあらず、却て御怒恐入り奉り候へども、私ども尊君の祿を食み、俱に天を戴（可目法）かざるの義もだし難く、共に地を踏まざるの分捨て難し。而して、晝夜艱難仕候。恥を抱き相果て候ひては、泉下に於て申上ぐべき詞これなく候。よつて、御意趣を繼ぎ奉るべくと存候より、今日を相待つこと一日三秋の思に御座候。四十七人の者ども、雨に臥し雪にたゞずみ、一日二日に漸く一食仕候。老衰の者、病身の輩は討入をあせり候へども、蟻の斧を頼むの笑を相招き、愈以て尊君の御恥辱を相殘し申すべきかと控へ居候ひしかど、止む事を得ず、昨夜申合せ、上野介殿御宅へ推參仕り、即ち上野介殿御供申

し、これまで參上仕候。この脇差は尊君先年御祕藏、我等へ下し置かれ候。只今返獻仕候。御墓の下、御尊靈これあるに於ては、再び御手を下されて御鬱憤をはらし給へ。右の趣四十七人一同申上候。

義士一同みな涙を流す。一篇の結末ことに哀痛なり。千載の下、なほ讀者をして泣かしむ。（四十七士）

二〇 北地の冬

五十 嵐

力

稻刈が済んで、背戸の熟柿が紅アヤに染まるころになると、そろそろ霜柱が立つ。そして、道を歩くと、下駄に土がくつ附いて重くなる。西の月山湯殿山ツキヤマが白くなる。肌を裂く様な

國文學者。早稻田大學教授。

共に羽前國に在る。

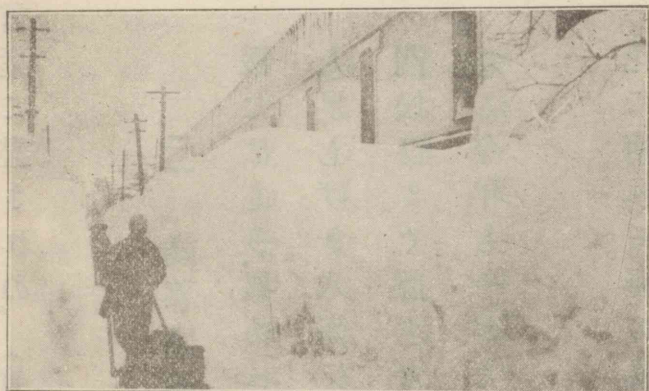
寒い木枯が吹荒む。かくして、我が郷に冬が来るのである。十二月になれば、全く雪に閉込められてしまつて、家々では、陰鬱な冬籠りの生活に入る。四方山の話や人の噂が炬燵を圍んだ人々の口に上る。吹雪の時などは、少しの戸の隙からでも細かい砂の様な雪が吹込むので、雨戸をしめきつて、一日、薄暗い生活をする。それでも、晴れた日には南の縁に、婆さんの針仕事も見受けられる。子供等は小さな赤い手をして、棒の様な氷柱を持つたり、雪達磨を作つたりして遊んで居る。雪解の雨垂がぼたんくと、静かな冬の日にさえ渡つて聞える。

一月の末になると、五六尺も積つた雪が踏んでももぐらぬ

位に堅くなる。やがて、壯快な兎狩が始る。子供の氷滑も

盛になる。小山に登つてみると、山となく、野となく、見渡す限り只眞白な中に、長く紺青の一筋道を畫いて、最上川がうねつて居る。」

三月の末には、雪が段々融け、最上川の水量が増して、漸く暖い、楽しい春になる。梅櫻桃李皆一時に咲揃ふのである。まるで冬の世界とは違つて居る様な心持がす



ノロシ-テスの雪

る。自然から、雪と云ふ大壓迫を受けて居た人々が、冬の陰

鬱な生活を送り出して、花咲く春に逢つた時の愉快は、實に言葉に盡されぬ。(實習新作文)

*國文學者。歌人。
宮内省御歌所寄
人。明治四十三年歿す。

二 歳暮感懷

*中 邨 秋 香

霰たばしり、風あれて、

人足しげき八街に、

門松ひさぐ聲すなり。

今年もやがて暮れぬとや、

暮れぬとや。

花に宿れる春の鳥

千草に眠る秋の蝶

結びもとめぬ夢のまに、

はや一年は過ぎにけり、

過ぎにけり、

書讀む夜はの窓の雪、

闇は照さで徒らに

頭にのみやつもるべき。

たゆまず學べ、時のまも、

時のまも (新體詩歌集)

三 一年ノ計

一年ノ計ハ春ニアリ。

落花ハ枝ニ上リ難シ。

百聞ハ一見ニ如カズ。

入ルヲ量リテ出ヅルヲナス。

渴シテモ盜泉ノ水ヲ飲マズ。

能ハザルニアラズ、セザルナリ。

百里ヲ行クモノハ九十ヲ半バトス。

過チテハ改ムルニ憚ルコト勿レ。

瓜田ニ履ヲ納レズ、李下ニ冠ヲ整サズ。

*名は夏子。
女流小説家。
明治二十九年歿す。

二三 田舎の祖母に

樋口一葉

今朝は風はげしくて、北向の部屋は窓すら明け難きや



うに御座候。山おろし烈しき御地はいかばかりかと、
父母ともく御案じ申上げ、御噂致し居り候。

御祖母様には、この寒さに御障もあらせられず候や。

歳暮に伯父様より御文たまはり候ひし節、相變らず御

健かにて、伯母様も御及びなきほど御内の御用何くれ

と遊ばさるゝ由承り、父母はじめ私ども、嬉しう存じ

上げ、花の頃にも相成候はゞ、兄こと御地へお迎に参り、

御誘ひ申して、上野向島の人出御目にかくること、致

したく、一同待居り候。なほ一月ほどの間は寒さ加は

り申すべしとか。何とぞ御身御大切に御風召したま

はぬやう遊ばされたく、たゞこれのみ願ひ居り候。

つたなき出来には候へど、私仕立て候綿入、小包郵便にて御送り申候間、御召の下にお重ね下されたく候。母よりは例の羊羹差上げ候。いづれも二三日うちには着き申すべく候。當地にては誰もくかはることなく候。父は昨年おしつまりて昇進致し候。御喜び下されたく候。これは、御年始状差出し候ひし節、申上ぐべかりしを、つい洩したれば、そなたよりとの申しつけに御座候。どなたさまにも宜しく申上げ下されたく候。かしこ。

(通俗書簡文)

二四 孝女いち

資性孝順、よく盲父・狂母に事へ、又、善く病める夫をいたはり、貧しき一家を、けなげにも、かよわき身の双肩に擔ひ、つひに明治四十年賞勳局より緑綬褒章を授けられたる世にも感ずべき一婦人あり。山崎いちといひ、武藏國入間郡川越町の人なり。

いちの父は新太郎といひ、家屋敷の外に田畑も所持し、酒屋を営みて、相應に暮しけり。安政三年、新太郎、二十八歳の時、不幸にして眼病を患ひて、盲となりて、職業もとられずなりぬ。かゝる中に、いちまつの二女をまうけしが、妻たいは育兒の傍、女の細腕に辛くも營業を續け、これより、家計

漸く傾き、心を痛むること多かりしが、明治六年に至りて、末子ちかを生みし時、たいは産後の日立悪しくて、心狂はしくなり、且、乳さへも出でざるに至りぬ。嬰兒は呱呱として飢



山 時 いち

を訴ふれども、母は爲すべきすべをも知らず。此の時、長女いちほ纔かに十二歳の少女なりき。世の常の娘なりせば、たゞ悲哀に沈むのみなるべきを、いちほは悲みの中にも心に決する所ありて、嬰兒を抱きて乳ある家を尋ねて、乳を貰ひてはぐくめり。さるを心狂ひたる母は、これを喜ばず、却て叱り罵るに、いちほはこれに少しもさからはず、摺

粉を造りてちかに與へ、折を見ては貰乳して保育する、その辛勞一方ならず。

さる程に、乳不足にて育ちし身のか弱くて、ちかは十二歳の時、暑氣に冒されてみまかりぬ。母痛く之を悲しみ、朝夕線香をたき、位牌を擁して哀みの涙に暮れけるが、時々は家を飛出して、ちかの墓前に至り、念佛稱名して夜を明す事もありき。されど、いちほは逆うては爲悪しと思ひて、すべて其の爲すがまゝに任せ、母の家において線香をたくときは、火の元に注意し、墓に參る時は、隠れて後よりつけ行きて、木蔭より見護りたり。かくの如きこと七年の長きに及びしが、いちほは聊かも倦める色なし。其の焦心勤勞いばかりなり

けん。思ひやるだにあはれなり。かゝる殊勝なる振舞に、いちハ川越の孝女として、其の名を近郷に知られたりしが、世話する人ありて、明治二十四年の一月、齡二十九歳の時、同郡南古谷村の古田寅吉といふを迎へて夫としたり。かゝる不幸なる家をもいとはて來りし程のものとして、寅吉も亦温良にして、よくいちの心を酌み、力を戮せて狂母と盲父とに事へたり。いちの喜譬ふるに物なく、貧しき中にも、暖き春光に浴する心地せり。然るに、二十九年に至りて、頼み切つたる夫も亦病に打臥す身となれり。いちハ寢食を忘れて、父と夫との看病に手を盡し、粉骨碎身、奉養至らざるところなかりき。さるに、父は

三十二年に歿し、夫も亦三十四年に同じ旅に出立ちぬ。いちの嘆いばかりなりけん。幼き時より家庭の苦勞を一身に引受けたる身の、始めて良き夫を持ちて、苦樂を語り合ふ嬉しき日もつかの間にて、またも暗黒の巷に入れり。足らぬ家政を身一つに引受くるだにあるに、狂母を抱へて其の満足を得しめんとす。尋常の女なりせば、己れ亦共に氣も狂ふべきを、いちハ心を勵まし力を盡して、能く一家を支へ、孝養を缺きたることなかりしぞけなげなる。不幸に不幸を重ねて、家計益傾き、父の歿りし後は、所有の田畑も人手に渡り、酒屋の營業も續くること能はず。いちハ纔かに小作をなし、賃仕事などして、家計を支へけり。心狂

ひたる母はいちの苦心をも思はず、或は菓子をねだり、或は食物の好悪をなして、むづかる事恰も頑兒の如く、動もすれば、親を乾し殺さんとするか。など怒り罵ること屢なり。殊に、母は酒好きにて、一度に一升の酒を傾け盡すほどなれば、日々三度の食膳には必ず酒を供へざるべからず。また、大の煙草好きなるに、半身不隨にて手足の自由ならざるが故に、いちを傍に侍せしめて、煙草をつめ火を吸付けしむることつねなり。これも日に幾度ともなきことなれば、其の繁忙いふばかりなきに、剩へ或時は其の遲きを怒り、或時はそのつめ方のあしきを罵る。先に父と夫との看病をなしたりし際にも、彼方に手間取ることあれば、此方は怒りて、我を

顧みざるか。」と口きたなく罵りつ。されば、母の眼に觸れぬやう心を配りて、かの二人をいたはりたりし其の苦心、察するに餘りありき。或人このさまを見て、あはれがりて、いちに向ひて、母上がくさぐさの求をせらるとも、元來常ならぬ心のことなれば、御身は萬づ其のまゝにせられずともありなん。或時には寧ろ叱りて戒めらるべし。母御を叱りたればとて、誰も御身を悪しく思ふ者はあらず。といひけるに、いちは色をかへて、答へて曰く、心狂ひたればとて、わらはの爲には大事の母なり。たとひ無理を申されんとて、子として母を叱らんはわらはの忍びざる所なり。わらは、不運打續き、父には別れ

夫には死なれ今は何の樂みもなし。唯母に事ふるをせめてもの樂みとす。若し母の事を見ることなからんには、此の世に永らへんかひなからん。如何にもして母に不足なからしめんと、心ばかりはあせれども、見らるゝ如き貧しき身の、思ふ半ばにも満たぬ口惜しさよ。といひさして、よゝと泣きければ、その人いたく恥ちて、その餘を語らざりき。かくて、よく深切に母を看護し、その機嫌を損ぜず、田畑に行かんとすれば、必ず先づ母の許を乞ひ、歸れば、好める物をすすめ、足腰をなで、ついで、また母の承諾を得て業に走り、夜は枕邊に侍りて勞り慰め、母の熟睡して後に夜業を始め、深更に至りて止む。かくて、母時々目をさまして、或は厠に往か

んといひ、或は煙草の火を求むれば、いちはかひなくしく起ちてその事に従ふ。凡そ此の如きこと多年、一日の如し。人々その至孝に感じ、ひそかに同情の涙に袂を絞るものおほし。

妹まつはさきに同郡山田村なる松平茂平といふものに嫁きたるが、茂平は商賣の手違ひより精神に異狀を來し、遂に家出して、そのまゝ行方知れずなりぬ。折しも、まつは妊娠せる際なりしが、いちは妹の不幸を捨置くに忍びず、一飯の食を分ちても、困苦を共にせん。とて、まつを我が家に引取り、まめくしく世話したり。やがて、その産落し、女兒にわかと名をつけて、籍をば夫の家に入れしめしが、兩人の身

の上を不便がりて、そのまゝ我が家に留めて、養へり。こはいちに取りては所謂「重荷に小附」なれど、いちには少しも苦とせず、友愛の情はいよゝ切なり。いちにはこれぞといふほどの教育を受けたる身にもあらぬに、かく萬づに道をつくして而も多年渝らざるは、洵に聖賢の教に稱ふものといふべきなり。宜なるかな、事、雲の上に聞えて、緑綬褒章を賜はりぬ。女にまれ男にまれ、貧しきも富めるも、まして物學びしたらんものは、かゝる善行に鑑みて自ら顧みる所なかるべけんや。（善行大鑑に據る）

* 義大夫節の三味線彈。壺阪の作曲をなす。明治三十二年歿す。七十二歳。

二五

名人團平

「御免なさりませ、團平御師匠さんは此方で。」と海松布の様な着物を着た乞食が、初代豊澤團平が住居の格子先へ立つた。誰ぞ來なはつたやうちや。ちやつと出て見や。」と、女房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。「へい〜。」と濡れた手を前垂で拭きながら、立關に出た女中は右の手で纏を外しながら、敷居際に手をついて、障子をあけて來訪の客を見上げた。「ちよつと、その何で御座ります、お師匠様にお目通りを。へい〜。」と、物乞は揉手をしながら、腰を屈めた。「あらつ。お前、お貰やないか。お家はん、お貰の癖に旦那はん……まあどうだつしやる。」女中は頓狂に叫んだ。

「何や、騒々しい。どうしたと云ふのや。」と、女中の仰山な聲に釣られて、女房も出て見た。

「此の様な服装を致しまして、誠にはや何で御座りますが、どうぞ一生の願で御座りまするで……へい。お師匠様にちよつと。」もうそない事出来へんやさかいな。それに何用か知らんが、お師匠様もお留守やよつて、さつさと往んでおくなはれ。」と女房は面を擧めた。「そこをどうか一生の願で御座りまするで。」と、乞食はしつこくて、動きさうにもない。「何ちや、騒々しい。」と、主人の團平は襖から體を半分出して立關を見た。「あんたはん、まあどうだつしやる。お師匠様に逢ひたいいうてな。ほんまに厭なお貰や。」と、女房の聲には

角があつた。「なに、お客様か。」と、團平はやをら立關口へ出ようとした。「よしなはれ、お貰だつせ。」と女房は良人の袖を控へた。

「何、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや此の世に望も御座りませんで。へい。」と、格子先の聲には濡みがあつた。「一生の御願。ほう。」と、團平はたまらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生の願で御座りまする。」團平はつと進んで、その海松布の様な着物の珍客を見た。さうして、慌てたやうに、「これはようこそその御尊來。さあ〜どうぞ。」と、自身で格子をあけて、「こらつ、何を愚圖々々してゐやる。お洗足なと持

て來んか。」と女共を叱つた。そして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女共は唯呆れて物もいへなかつた。

「むさいなりで誠にどうも相濟みませぬ譯で。へい。」と、乞食は座にえ堪へぬらしくもちくちくしてゐる。

「いや、どう致しまして。して、御用は……。」と、團平は賓客に對する禮を崩さなかつた。

「實は、その、突然の儀に御座りまするが、私は至つて義太夫の三味線を伺ふのが好きで御座りまして。しかし、まだその何でござりまする、お師匠様のを伺つたことがござりませぬ。でそれをば一生の願とはして居りまして、御覽のや

うな、はや見る影もない態で、何ともどうも……。」と、きれんぐの言葉に、境遇を恥ぢるそぶりは現れて居るが、其の熱心の態度は眼の輝にも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。

「さよか。それは、まあようこそ。よろしい、彈きませう。どうぞ遠慮せんと、聽いておくなはれ。こら、お茶とお菓子。それから、お煙草盆はどうした。いや、どうも失禮な奴ばかりで。」と、名人團平は次の間に立つて、三味線を抱へて來た。「誠にはや有難いこととござりまして。」と、乞食はたゞ感謝のみである。

調律の撥音にさへ、浪花の街のどよめきは靜まつて、秋の午

*花のト野譽の石
碑さいふ淨瑠璃。

下りは夜半のやうだ。弾きだしたは志度寺のお辻の最期。その水際立つた絃の音には、富貴もなく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥もなく、唯すみわたる妙絶奇絶の音ばかり。乞食の頬には涙が滂沱と傳はつた。乞食は欣然として辭し去つて、何處とも知らず往つてしまつた。それを飽かずく見送つた團平の眼には濡みがあつた。その名人の眼の濡みこそ、知己に遇つた歡喜と二度と會はれぬ別離の悲みとを語るものであつた。やがて、室に歸つた團平は、藝人の妻としての女房の不心得を責めて、離縁を申渡したが、同輩門弟等の詫で漸く納まつたといふことである。其の名人、今は天に歸つて、不思議の音締はもう耳に

することが出来ぬ。

あゝこの音樂の天才は、時の流と共に過ぎ去つてしまつた。併し、この美はしい譚は永久に生命をもつて、亡びることはないであらう。(耳の趣味に據る)

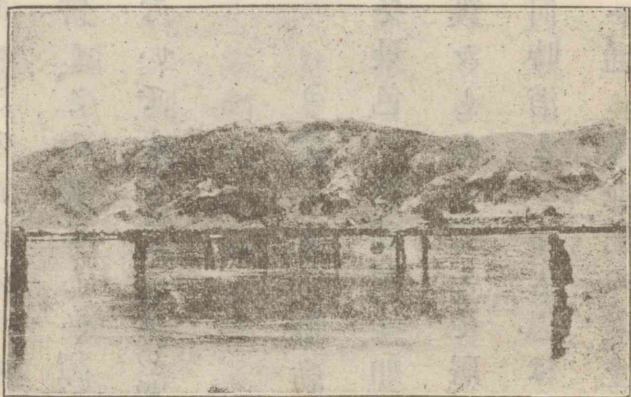
二六 氷の諏訪湖

*吉江 孤雁

*名は喬松。文學者。早稻田大學教授。

冬景色の諏訪湖は如何にも莊嚴なものだ。四山が盡く雪。簇々として聳えて居る八ヶ嶽は純白の姿をして、その雪が何時消えるとも思はれない。湖水を繞る枯田細徑、古城址へ通ふ樺並樹の道、上下諏訪の市街、小阪觀音の絶壁、盡く雪に覆はれて、四方の山からおろして來る風が、縦横に湖面の

滑かな氷上を吹きわたる。月夜に於ける氷上の景色は凄
 い位である。山といふ山は銀色
 に鍍金されて、市街の燈火も、村々
 の火影も、凍り着いたやうに見え
 て居る。風も夜間は多く起らな
 い。静寂の極み。この様な地に
 人が住んで居るのかと疑はれる
 位である。以前は「氷引き」と云つ
 て、夜間、厚さ三四尺もある氷を四
 角に切抜いて、その穴の上で篝火
 を焚いて、その火の下へ寄つて来る無数の鮎を網ですくひ



諏訪湖スケッチ

とつて居た。その火が點々として氷上に散在して見える
 のは、一種の奇觀であつた。が、今は「氷引き」が禁ぜられたの
 で、その火影を見ることは出来なくなつた。
 二月が過ぎ、三月の下旬になると、四山の積雪が次第に溶け
 て湖水に流れ込む。白ちやけて見えて居た森林の頂が、薄
 紫に染つて来る。枯田の上に雞の聲が長閑に聞えだす。
 その頃湖水の面に一大變動が起つて来る。
 稍生ぬるいやうな風が二三日、山から山へ吹繞つて、湖水の
 面に打當つたかと思ふと、夜一夜、恐しい響が氷の中から聞
 えて来る。下諏訪の客舎に始めて泊つた旅人などは、この
 響に思はず戸外へ飛出すといふ事である。

響が一日々々と強く鋭くなつて來るかと思ふと、風が一時に稍強く吹く。一、大叫喚、慣れて居るものでも思はず飛上る位。夜が明けてから見ると、南北に亙つて一道の水流、厚い氷は縦横の龜裂を生じて、之が次第々々に分離しだすと、壓へられて居た水は、一時に洶々として涌きあがる、風は又連日吹渡る。打當り、打割り、氷塊をば盡く何處へか流し盡さなければ已まない。波は愈、奔騰し、一様に白い頭を上げて四方に狂ひまはる。

水の色を藍青に染めて、四山の若緑が影をひたす頃、山櫻の花が盛にちりこぼれる。汀の蘆は青くのびて、一片の白雲が悠悠とその上を掠めて過ぎる。(高原)

東京帝國大學教授。理學博士。動物學者。大正十年卒す。

二七 深海

飯島

魁

深海とは何ぞ。予はこの問に對して極めて簡単に、それは常闇常冬常靜の處だ。と答へようと思ふ。ちよつと陸上で考へると、深海の底も、陸地の如くに、山あり、谷あり、野あり、岩石磊々としてゐる様に思はれるけれども、實は、さうでなくて何等の景色もなく、一樣な平地式のものである。

何故に、深海は常闇なるか。いふまでもなく、光線が達せぬからである。太陽の熱は百五十尋以下に達しないが、光線は遙かに下まで行渡る。併し、三百尋乃至五百尋になると、日光も極めて少量で、九百尋も行けば、絶對になくなる。二

三百尋も行けば其處には全く植物がなく、棲息してゐるものは動物ばかりである。然らば、かゝる深海の底には全く光がないかといふと、さうとは限らない。日光は達せぬけれども、發光性の動物がゐて光を放つ。學者の想像によれば、夏の闇夜に汽船で大洋を航海すると、船の舳、艫又は舷側の方面に、小なるは線香花火の如く、大なるは金盞の如き光のちら／＼と閃くのを見るやうに、發光性の動物の作用によつて、深い／＼海底にも燐光がある。その有様は、丁度、暗夜、飛行機に搭じて東京市の上を飛駛つて、電燈、瓦斯燈、石油燈の閃々たるを見るが如きものであらう。深海の底は常冬である。光よりなほとほりの悪い熱は深

海の底に這入らない。熱帶地方に於て太陽は絶えず海水を暖めてゐるが、暖められた水は常に表面にある。その水は貿易風に煽られて海流を起し、赤道を中心として、南と北とへ流れ、兩極に近づけば、冷たくなつて、下へ沈み、表面とは反對に、北のものは南へ南のものは北へ流れる。併し、海の底では、流の道筋はきまつてゐない。深い處は、僅かな流があるばかりである。かやうな處では、温度は常に氷點乃至氷點以下である。無論、温度は深さによつて違ふが、懸離れた差異はない。即ち、氷點以上にすつと上ることもなければ、また低く下る様なこともない。これには多少地熱の關係があるであらう。

最後に、深海の底は常靜である。前にもいつたとほり、太平洋に於ける日本海流、大西洋に於ける灣流の如き海流はあるが、二百尋も三百尋も下にくだれば、何等の影響もない。表面では、暴風が吹荒んで、狂瀾怒濤が山の如くであつても、海底は極めて靜かである。深海の底は無風・無音である。絶對的に靜寂である。其處には、耳を劈くやうな自轉車もなければ、電車もない。無論、バクテリアはない。バクテリアがなければ、腐敗もなく従つて、臭氣もない。併しながら、生物はある。生物があれば死ぬものゝあるは明かであるが、死んでも腐らず、其處にゐる動物がみなそれを喰へて了ふ。かくの如き靜寂の境にもやはり生存競争は行はれて、

鴉や雀の死んでゐる死骸を見ることがの出來ぬやうに、深海の底の動物の死骸も、みな他の動物に喰はれて了ふ。海底は熱も光も音も無い、宛然たる死の國である。

二八 ペンギン鳥

杉村 廣太郎

南極の一夜は遠山の雪から明ける。さても、其の明けかゝる様の、奇しくも美しく見ゆるかな。

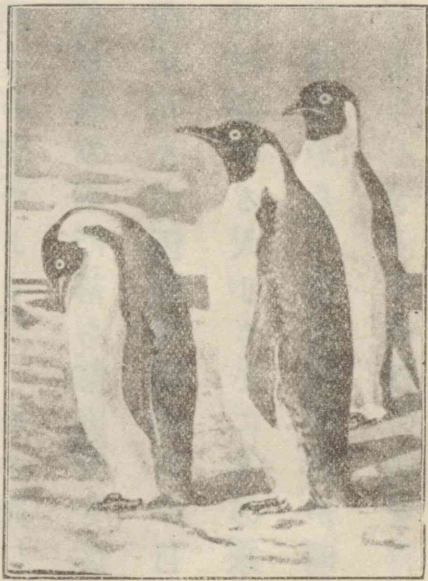
地球の南の果ての果てとあつて、日が出ても低い處を周るばかり。これが夏の間は殆ど地平線下に没することがなく、七十幾日かは晝間ばかりで打續くが、さて冬となると、其の反對に、日は没したきりで、夜は七旬の永きに亘る。

*東京朝日新聞記者。
楚人冠と號す。

其の夜ばかり續く冬の一夜の心細さ、到底人間界とは思はれない。太陽は五月中頃から全く消えてしまふ。初は、正午に、北の方で少し明るくなるが、やがてそれも消えて、常闇の夜となる。冬の最中には、華氏の氷點下五十度なごいふのが珍しくない。大烈風が颯々と鳴つて、雪を捲いて打付けて来る。偶、空の晴れた時、外面に見えるのは、微かな星の影と氷の破れ目に動く潮の光とのみである。耳にするものは氷の裂ける音。ぼん／＼とさながら銃聲のやう。稀に、氷の破れた間で、鯨がぶちや／＼と寝返りを打ち、又は、海豹が氷の中から飛出すとか、さては冬來ぬ前に、立ち後れた極地の鳥が悲しげに叫ぶ聲がする。この永い一夜が七月

中頃になると、一寸日の顔を見るやうになる。巔の雪が其の光を受けてぼうと紅に見える。この紅に光る遠山の雪の外、大天大地はまだ暗黒の鬼窟裏で、殆ど咫尺を辨ぜぬ鳥羽玉の闇である。これが幾日か経つて、次第に光が麓に落ち、氷雪の上に落ち、寥廓たる乾坤がこゝに全く明けて、一面皚々たる南極圏の朝ぼらけ、目も遙かに續く萬頃の氷雪、遠近に聳ゆる大小さまざまの冰山が、日光を受けて種々な色に照榮える。愈、南極の夜が明けて、春が來た。春來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともなく、北の方、海を泳ぎ渡つてこの南極圏に押寄する一群の怪鳥がある。氷上に泳ぎ着くと、宛ら隊伍を組んだやうに打連

れ立つて歩いて行く。これがペンギン鳥である。背には黒、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩脚で立つて歩



ペンギン鳥

くさまは、小作りな人間が黒の燕尾服に白のチヨッキ白のズボンで兩手を振つて歩くやう。而も互に出會ふ時はお辭儀をするやうな體で、首

を下げる。ペンギン鳥の植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數のペンギンが一緒に集つて巢をくふが、何等かの社會的制裁が行はれてゐると見えて、餘り甚だし

い喧嘩はない。中には、近處に親を失つた子鳥が、心細く巢に残されてゐるのを見て、自分の手に引きとつて養育一切の世話をするなどといふ、義俠心に富んだものもある。ペンギンは可愛い恰好の鳥である上、其の容貌、動作が如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。人を人とも恐れず、丸で友達のやうに、人の側へ寄つて来て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢がこれを聴きに來る。さうして、互に顔を見合せて、如何にも感に堪へぬやうな顔をし合ふ。氷雪の外に見るもののない處とて、よくく無聊に苦しむものと見え、何か變つた事があれば、ペンギンは隨分遠方から見に來る。大勢で

來る時は、必ず指揮官が指揮してゐる。如何にも奇妙な鳥である。(へちまのかは)

(二) 文學者。逍遙と號す。早稻田大學名譽教授。

(三) 後鳥羽天皇の文治三年二月。

(三) 加賀國能美郡にあつた關。

二九 安宅

坪内雄藏

時しも頃は春のはじめ、風なほ寒き北國路を、いたはしや、義經は兄頼朝の疑うけ、奥州として落ちて行く。主從僅かに十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身をやつし、日數程經て加賀の國安宅の港に着きにけり。義いかに、辨慶旅人等の噂によれば、安宅には特に關を設けて、山伏を嚴しく取調ふる由、如何にすべきぞ。辨、これはゆゝしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人々、いや／＼、何程の事かあらん。たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨、いや／＼、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩かなる手段を取りたし。」

義、然らば辨慶、ともかくもその方の工夫に任せん。よろしく計らひくれよ。」

辨、畏つて候。まづ考へ出したることは、我等かく山伏に身をやつせども、包み難きは我が君の御品格。畏れながら、暫く強力に御身をやつされ、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば、

忽ち見出され候はん。」

義ぎげに〜、これは尤よしの事なり。」

姿すがたをやつし、主ぬし従したがはやうやく關せきに近づきて、通とほらんとすれば、

關せきの役人やくにん戸と櫓やぐら左衛門さゑもん、

戸とやあ〜、山やま伏ふし、關せきなるぞ。名なをなのれ。」

とぞ呼よばはりたる。

辨わ承うつて候。これは奈良東大寺建立たうだいてうの爲ために、北陸道ほくりくどうを勸進こんしん

する山伏やまふしにて候。」

戸とそれは殊勝しゆせうの事なれども、山伏やまふしなるからは、この關せきは通とほし

難がたし。」

辨わして、そのいはれは、

源頼朝
源義經

戸とさればなり。鎌倉殿かまくらどの判官はんくわん殿御どのご不和ふわにより、判官はんくわん殿どのには山

伏ふしと姿すがたをかへて奥州おくしゅうへ落ちらるゝ由よしゆるに、諸國しよこくに新關しんせき

を設たけて、山伏やまふしをかたく止とどむるなり。一人ひとりも通とほし難がたし。

辨わ承うつて候。併ひし、實じつ山伏やまふしをこそ止とどめらるゝならめ。まこ

との山伏やまふしを止とどめ給たまふ必要ひつやうは候はじ。」

戸とあらむづかし。論ろんより證據ていこなり。まこと東大寺建立たうだいてうの

勸進こんしんならば、勸進帳こんしんぢょうのあるべきはず。こゝにてそれを讀よみ

みあげられよ。某たれこれにて聽聞きぶんせん。」

辨わ何なにと、勸進帳こんしんぢょうを讀よめとや。心得こころえ申まをして候。」

もとより勸進帳こんしんぢょうのあらばこそ、笈うしの中なかよりあり合せの卷物まきもの

一つ取出とし、勸進帳こんしんぢょうと名なづけつゝ、即智すなはちちを以もつて文ぶんを綴つり、まこ

としやかに聲高々と天にも響けと讀上げけり。
 戸櫓つくく、聞きすまし、
 戸、最早疑は晴れて候。御通り候へ。
 辨、かたじけなく候。
 げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に隨ふ強力を、
 戸櫓目ざごく見とがめて、
 戸、いや、暫く。その強力は通し難し。とまれ。
 と罵りぬ。すは、我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、
 皆一同に立ちどまる。
 辨慶騒がず、そらとぼけ
 辨、やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。

戸、いや、それはこなたより止めたるなり。
 辨、そは又何故。
 戸、あの強力が姿、判官殿に似たるゆゑなり。
 辨、奇怪千萬。判官殿に似たりとや。しかいはるゝ強力め
 は、一生の面目ならんが、さりとは腹立たしや。けふの
 うちに能登境まで行かんと思へばこそ強力雇ひたるに、
 僅かの笈を重げに負ひて人々に後るればこそ、貴人かと
 も怪しまるれ。憎さも憎し。いで懲らしてくれん。
 金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。
 これはと驚く人々を辨慶目にて制しとめ、尙も烈しく打据
 るけり。戸櫓漸く疑念をとぎ、

戸「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。とくとく一同御通りあれ。」
 いふに、人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思ひ、さらばくと立ちあがり、關路をあとにしつくと、奥州さしてくだりけり。
 (國語讀本)

*名は清。伊人、小説家。

〇三〇 雛祭の記

*高濱 虚子

我が幼児は去年の三月に生れたり、「ことしは初雛なれば、せめて内裏雛のみにても購ひくれよ。一度購ひ置けば此の兒の一生あるものなれば」など母なる人の切に望むに、やがて内裏雛と五人囃子とを購ひて與へぬ。幼児よりも母

五月節
 一月三日
 二月三日
 三月五日
 七月七日
 九月九日
 節句
 重陽

初ナテオ
 コナセコ
 戻ワリ

の喜たとへんにものなし。

奥の間の三尺の床に本箱を横たへ、机の抽斗を重ね、三重許りの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、淋しげながらも目美しく、我はゆくりなくも、我が亡き親のこと慕はしく、しのばしくなりぬ。

膳椀などの箱と共に棚の上に並べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき箆笥の壊れたるを觀世捨にて括りたるなど、我はこれを雛様箱と呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直ちに臺として其の上に祭りて樂しみしが、隣の家
 の美しきを見て歸りては、あまりに寂しく汚きに嫌らず、母

白の、幼イ
 等々の、お煎り
 了りと、お煎り
 した、お煎り
 有様、お煎り
 いた

カヤリ
 ハハワラ
 目、手
 ラカンカ
 (4)

*正岡子規

後でちやんと
と見かた
うらたけの
子 備 便 子 様

上に訴ふれば、男の子のするものにあらず。」と叱られて、我に女の兄弟無きことの情なく、果ては我の女にあらぬことをさへ情なく覚えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅かに自ら慰めたる事など、今の如く思ひ出でぬ。」かゝる所に、子規子規子の妹君より裸人形を幼きものにと送りこされたれば、五人雛子ばかりの淋しげなりしものも俄に引立ちて見え、それを内裏雛の何れの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議するもをかし。其の日の暮、箆筒・長持・兩掛より鏡臺・茶箆筒・金盃・雪洞など、何れも美しく、新に壇を飾ることゝなりたり。桃の花も生けられたり。菱餅もお煎りも白酒も供へられたり。やがて、小さき雪洞に灯ともすに、

*福岡の人。歌人。
慶應四年歿す。

雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲競ふかと覚え、五人雛子の鼓の音も今か響き出づらんと、たのし。幼き者の喜、母なる人の喜、さては髯男の我が喜、春色俄に三尺の廬に充ち満ちたるが如し。唯手足の無き古びたるはふこ様を此處に並べ見ぬことの物足らぬやう覺ゆるは、如何なる故にかあるらん。ふるさとの雛戀こひしき都かな。(寒玉集)

三 山彦

*大隈 言道

答へする聲おもしろみ、山彦を

かぎりもなしに呼ぶ童かな、

木の間に聞くらん、わらはへの

すさびにまぬる鶯の聲。

さし柳、さして幾日も経ぬものを、

根ざし引き見る友わらはかな。

おのが身にまがふばかりになれる子を、

猶はぐくめる親がらすかな。

先だちて山路すぎ行く牛の親に、

子牛より来る村時雨かな。

三 豪商と碩儒

東京日本橋通に一際目立つ呉服太物の大店がある。白

木屋とい。その目の覚めるやうな店頭（親牛が交上歩いてゐる時、村時雨の降るやうな）の裝飾は市中の花と呼ばれるくらゐ。遠近の顧客引きも切らず、店は日増しに繁昌してゐる。

さて、此の店を開いたのは大村彦太郎といふ京都生れの人だが、彦太郎が故郷を去つて江戸に来て、呉服商となつたまでの話は、實に立志成功の美談である。殊に、彼と共に志を立て、成功を競うたのが、一代の名儒三輪執齋だといふは、愈以て珍しい話である。

執齋は京都の醫者の子。六歳の時父に別れて、母方の一族大村某といふ商人の許に引取られた。この商人は即ち彦太郎の親父である。それで、兩人は兄弟同様に育てられて

貞享三年。

ゐたが、執齋十八の春の事一日彦太郎に向つて、何時までも人の厄介になつて居るも不本意なれば、一つ江戸に出て、思ふ存分やつて見たいもの。」と志のほどを明した。彦太郎もかね／＼同じ考を持つてゐたので、それでは一緒に出かけよう。」と、相談忽ち一決して、さて執齋は醫者か儒者、彦太郎は商人と、めい／＼志を立て、互に手を携へて江戸へ下つた。東海道五十三次も大方通り越して、品川に着いた時、執齋は彦太郎に向つて、さて、今までは互に助け合つて苦樂を共にして來たが、いよく江戸へ入る以上は、めい／＼離れ／＼になつて、精一ばい働かねばならぬ。お互に大願成就は十年先の事か、二十年先の事か、わからぬ。それまでは落着く

處さへ定まらぬこと故、居處を知らせ合ふことも出來ない。まして往來することは、迎も出來まい。ともかくも、こゝで別れて五年後の今月今日の夜、日本橋の上で再會することにしよう。」と語り出した。執齋も快く同意して、互に袂を別つた。時は貞享三年三月三日の事であつた。僅か四年の歲月、徒に過ぎば夢とも過ぎよう。此の間に相互に負けず劣らず、初一念を貫かうと誓つた二人の心は、さても殊勝なもの。かくて、執齋は、自分こそ一代の名醫とならう。大儒とならう。彦太郎



大村彦太郎

（二）
剛齋と號す。江
戸屈指の儒者。
享保四年歿す。
（三）
京都の大儒。
天和二年歿す。

は「己れこそ一世の豪商と呼ばれてみせよう。」と互に精限り
根限り勉め勵んだ。執齋は其の翌年佐藤直方の門に入り、
儒學を研究することゝなつた。この直方は山崎闇齋の高
弟で、當時の大儒であつたが、深く執齋の志に感じて、懇切に
引立てた。そのお蔭で、執齋は學問も速かに進歩し、三年許
りの間に先生の代稽古をするまでになり、上州前橋の酒井
侯より客分として十人扶持を賜はることゝなつた。

（四）
元祿三年。

やがて、五年目の三月三日となつた。執齋は夕方中間を一
人召連れて日本橋に行つて、彦太郎遅しと待ちうけてゐた。
間もなく、彦太郎もまた番頭を一人連れて來た。五年前笠
一つ杖一つで京都を飛びだしたこの兩人が、五年後の今日、

（五）
元祿五年。



三 今は漸く成功の端緒に就いた
輪 ばかりだと云ふので、互に居處
執 も明さず、職業も告げず、更に三
齋 年後の再會を約して、*またも袂
を別つた。さて、三年目の三月

各、一僕を従へるだけの身分となつて、昔の約束のまゝに、日
本橋の上に来て、互に心中を打明けた、その愉快さはどんな
であつたらう。併し、兩人とも
三日となつた。その夜半、二人は約の如く、再び日本橋の上
に相會した。執齋は若黨二人、中間二人に箱提灯を點け
させ、身のまはりいかめしく、堂々とおし出した。彦太郎も

また若者二人に小僧二人を従へ、いかにも豪商らしい扮装でやつて來た。この時、執齋ははや一かどの學者となり、前橋侯より三十人扶持を賜はり、他の大名にも澤山の門人ができて、其の名は儒者の間に高くなつて居た。そこで執齋は、年頃の志望先づく成就した。今はお互に居處を明し合はう。といふに、彦太郎も打領き、いかにも。自分は最初通一丁目に微かな小切店を開き、主僕兼帶の一人で働いて居たが、段々と身代を仕上げ、今では五十四人の男女を召使ひ、人にも知られた吳服商となつて、屋號を白木屋と呼んでゐる。と答へた。かくて、兩人は改めて兄弟の契を結び、彦太郎の方二歳上なればとて、兄と定めた。白木屋の祖先は即ち

*
江戸日本橋通一丁目。

この彦太郎で、爾來子孫相繼ぎ、二百餘年の今日まで、家運益榮えて居る。(實業補習讀本)

三三 樂しき我が家

私の家は、町の中ほどに在つて、今は兩親と祖母、それに兄弟五人、都合八人の家族である。父は五十の坂を越した白髮交りの老人で、常に、人は正直が何より大切だ。と口癖の様にいはれる。植木が好きで、家業の餘暇には花鋏や如露を手にして居られる。母は几帳面で、朝から晩まで寸時も休まず、吳服商賣の合間には裏の畑に野菜も作られる。

*兄弟五人
一、上の兄。
〇、上の姉(嫁す)。
二、次の姉。
三、小さい兄。
四、自分。
五、妹。

上の兄は一昨年の商業學校の卒業で、何事もよい加減といふことが大の嫌、不徹底、不徹底といつて叱られる時は、本當にこはい兄さんだと思ふこともある。次の姉は、やさしいたちで、裁縫が好きで、上の姉がかたづいてからは、何時も母の手助や、兄弟の身のまはりの世話をしてくれる。正直一途な小さい兄は、十二里先の師範學校に這入つてゐる。妹は何事にも辛抱強く器用で、私にはとても出來さうもない手仕事を、根氣よくする。そして拵へ上げて父母に見せては褒められてゐる。不器用な私はほめられたためしが一度もない。一番敬はれて又一番人の好いのは祖母で、そして私のいふ

事は何でも聽いてくださる、

八人の家族が、波風激しいと聞く此の世を、毎日實に平和に暮してゐる。夕飯の折などは、大きな食卓を圍んでずらりと並び、皆にこゝろして色々な話をしながら、睦じく食事を済ます。かういふ時には、嚴格な兄も、實にやさしい兄さんである。食後はそれ〴〵用があるので、二三時間は本當に靜かであるが、その中自然と茶の間に集つて來て話はずむ。いつの間にか十時になる事もある。その中一人減り二人減り、銘々自分の臥所に入つて安らかな夢を結ぶ。晝間のうちは皆が受持の仕事をせつせとする。私の割當は、歸宅してから部屋々々の掃除、庭掃除。そんなことでも、

父母は子供等の爲にどれ程助かるか知れないと喜ばれる。私はそれを聞く度にもつともつと手助をしなければすまないと思ふ。

庭は可なり廣い。そこには樺の木や椎の木や其の他の木が、高く風に嘯いて聳えてをる。運動も自由に出来る。立木を利用してぶらんこも出来る。

父の丹精は、四季をりくくの美しい花になつて我等を楽しませる。この頃は盆栽の紅梅が盛である。海棠の蕾も大分ふくらんで来た。

三四 曾我兄弟

森* 林太郎

鳴外と號す。文學者。衛生學者。醫學博士。文學博士。陸軍々醫總監。帝室館博物總長。大正十一年歿す。年六十一。

場處(伊出の農家)

人物(曾我の從者鬼王丹三郎登場してあり。そこへ五郎登場)

丹三 お兄上様がお歸りなされて、

鬼王 お待兼でござります。

五郎 さうか。兄上は歸らしやつたか。

(十郎奥より登場)

十郎 五郎、待つてをつたぞ。(從者等に)そち達は暫時遠慮い

たせ。

從者等 はあ。(退場)

十郎(小聲にて)五郎。いよ／＼今宵ちやぞ。叔、工藤が假屋ちやがな。案内は豫て知つてをるが、精しい様子を探りた

(三) 富士山の西麓の裾野。建久四年五月源頼朝富士野の狩のむりの旅館のあつた處、今駿河國富士郡白絲村狩宿。そこに曾我兄弟を祀る曾我八幡さいふ小祠がある。

*相模國足柄下郡
下曾我村。
東海道國府津の
北一里。

さに、けふ午過の事であつた、大幕の間を覗いて、ふと家人等に見咎められ、ゆくりなく酒宴の相伴をいたいた。客には吉備津宮の宮司がをる。宮司はさして妨にもなるまい。かう何もかも分つて見れば、結句見咎められたのが僥倖かとも思うたが、又つくづくと思ひ返せば、慙に面を曝して、若し用心でもせられては、諺に謂ふ毛を吹いて疵を求めたやうなもの、只そればかりが氣懸りぢや。五郎 小聲にて、なに。用心を致いたと申して、何程の事がござらう。あゝ、時節到來、喜ばしや。此の上は冠者原に、昨夜したゝめた文を持たせ、曾我へ返さうではござらぬか。十郎 (小聲にて、さうぢや。遅れては門出の邪魔ぢや。(呼ぶ)鬼

王、丹三。

兄弟これへまゐれ。

(二人登場)

二人はあ。

五郎 呼びをうり
ト↓ウ

十郎そちたちを呼うだは別儀でない。雨中夜陰の遠路ゆる、苦勞には思はうが、今から曾我へ使に參れ。

鬼王そんなら今宵、

丹三お二人様が、

二人お打入になりまするか。

五郎しつ。

十郎 (小聲にて、いや。そち達には隠し果つべき事でもない。

曾我兄弟

さりながら、

あさましき此の同胞に、

年頃仕へし幸なさよ。

報いせんとはしつれども、

我等の力及ばねば、

其の儘けふの別れになつた。ゆるしてくれい、

鬼王勿體ないお詞ながら、それより今宵の御供に、

丹三どうぞお連れ

二人下さりませ。

五郎いや。それはならぬ。曾我にござる母の許へ遣るべ

き使者は外にない。

思案に任せてくたはさう感謝

鬼王そんならどれ程願ひましても、

五郎ならぬ。(起つ)

十郎(起つ)篤と胸を落ち着けて、得心いたいていつてくれい。

(兄弟奥へ退場)

鬼王こりや、丹三。伊賀の山田の冠者が事をお主は聞いた

ことはないか。

丹三いゝや。知らぬ。それがなんといたいたのぢや。

鬼王さいつ年、伊賀の國人で、山田の小三郎惟行と云ふ六波

羅殿の郎黨があつた。それが保元の軍に八郎御曹司と

對陣して、討死と心を定め、一人の冠者に故里への言傳を

誂へた。すると其の冠者がな、口惜しい仰せを承つたと

云うて、主より先に敵陣へ駈込んで討死した。

丹三ふん。分つた。我々二人も

死ぬるまでぢや。

鬼王さうぢや。死ぬるより外、途

はない。さりながら御兄弟と

我等とは、

まだ總角の昔より

四人はなれぬ中なれば、

尊き卑きのけぢめさへ

忘れて年を経しものを、

今宵のお供がかなはぬとは、なんたる無念のことぢやや

ら。思へば胸が煮え返る。

丹三おう。さもあらう。河津家の敵は我等が敵ぢや。討

ちたい心に高下はない。なぜ下司には生れたやら。

(二人手を取り泣く。)

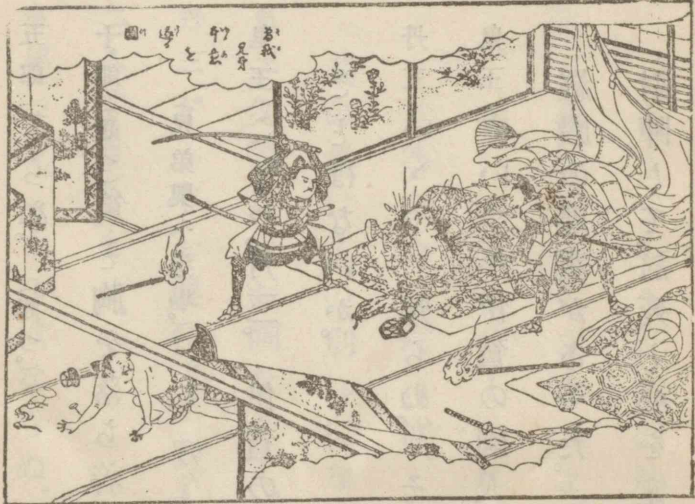
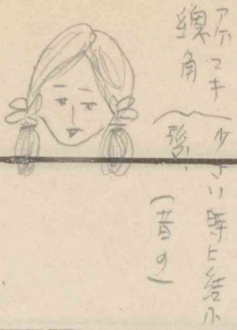
鬼王あゝ。めゝしい歎きぢや。

(雨の音)

折好く降り来る雨の音に、紛れてこゝで刺違へ、三途の川
で御兄弟が、本意を遂げて來られるのを、お待受申すまで
ぢや。お支度最中のお二人が、よも聞咎めはなさるまい。

(二人胸を開き、互に刃を擬す。)

鬼王いざ。



丹三 いざ。

五郎の聲(奥より) やあ、兩人暫く待て。

(十郎五郎登場。打入の支度。記念の品を持つ)

十郎 神妙なそちたちが志は、生々世々忘れぬぞよ。さりながらそちたちは穉い時に親に別れ、母を残して死に、行く子供の心を知らぬと見える。なんの我々兄弟が、そちたちを卑しんで、具して行かぬと申さうぞ。どうぞ我等になり代つて、母上に逢うてくれい。

(遺書と記念の品とを出す)

此の文と小袖とは母上に奉る。貧しき中に飼ひならせし二匹の馬には、鞍を置いて祐信主にまゐらせる。又弓

矢と行藤（ちかばき）とは、そちたち取つて記念（かたみ）にせい。

鬼王さては死ぬにも死なれませぬか。

五郎時移つては詮ない事ぢや。

十郎 疾うくまゐれ。

二人はあ。

十郎 鬼王起ち、厩より馬を牽出し、丹三郎と共に、記念の品を結び付け、蓑笠を着く。

鬼王 そんならこれで我々はお暇をいたします。

丹三 此の上は只御本意を首尾好うお遂げなさるやう、切に

お祈り

二人申しまする。

六訂女子國語讀本卷二終

日八十月二年四十大
齊定檢省部文
書科教科語國校學女等高

行	發	版	初	日	三	月	一	年	五	十	三	治	明
行	發	再	訂	六	二	一	三	十	三	三	三	治	明
行	發	三	正	日	七	十	月	一	五	六	十	治	明
行	發	四	正	日	二	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	五	正	日	九	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	六	正	日	八	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	七	正	日	七	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	八	正	日	六	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	九	正	日	五	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十	正	日	四	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十一	正	日	三	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十二	正	日	二	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十三	正	日	一	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十四	正	日	九	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十五	正	日	八	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十六	正	日	七	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十七	正	日	六	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十八	正	日	五	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	十九	正	日	四	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十	正	日	三	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十一	正	日	二	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十二	正	日	一	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十三	正	日	九	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十四	正	日	八	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十五	正	日	七	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十六	正	日	六	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十七	正	日	五	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十八	正	日	四	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	二十九	正	日	三	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十	正	日	二	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十一	正	日	一	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十二	正	日	九	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十三	正	日	八	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十四	正	日	七	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十五	正	日	六	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十六	正	日	五	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十七	正	日	四	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十八	正	日	三	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	三十九	正	日	二	十	月	一	三	三	三	治	明
行	發	四十	正	日	一	十	月	一	三	三	三	治	明

六訂女子國語讀本 全十册

發賣所
東京市神田區
美土代町三一
金港堂書籍株式會社
各府縣特約販賣所

昭和二年
臨時定價
卷一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百
各金六十六錢

不許複製

定價
卷一、二、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百
各金參拾九錢

著作者 吉田彌平
同 小島政吉
同 篠田利英
同 岡田正美
發行所 金港堂書籍株式會社
代表者 安三郎
印刷所 獅子吼堂印刷所
東京市神田區美土代町三丁目一番地
東京市麹町區飯田町三丁目十番地

